

満洲の内在化と台北描写

——林輝焜『争へぬ運命』における満洲の影と潜在的輿論——

柳 書 琴

(陳 凌 虹 訳)

はじめに

一九三一年九月一八日夜に瀋陽郊外東北部で起こされた計画的な爆破事件は、中国東北地域という辺境を東アジアの政治的激動に巻き込み、第一次世界大戦後の強権秩序の発火点となった。清朝以来「満洲」と呼ばれてきた中国東北地域は、一躍二十世紀前半の世界の政治、経済、文化が競合する東アジアの舞台の一つとなったのである。

日本帝国の南の辺境にあった植民地台湾では、満洲事変後、メディアが遠く中国北方に起こった衝突事件を追跡報道したほか、多くの作家が彼らの胸中にある混沌とした満洲への思いを小説として表現した。注目すべきことは、この時期に満洲というテーマに触れた作家の多くは、植民地の首都——島都台北——から自身の社会を

観察し、時代の変化をうまくキャッチできる作家たちであったことである。

満洲を題材とする台湾の小説は、どのような時代背景のもとに生まれたのか。満洲というテーマは島都の描写とどのように関わり、またそこにはどのような批判が隠されているのか。筆者の考えでは、島都台北は近代都市へと発展していく過程において満洲事変の勃発という外的影響を受けたが、これによって台北は情報、貿易、国防面における役割が強められ、帝国の東アジアネットワークにおける重要な都市となっていった。言うまでもなく、台北は決してテクスト化によって初めて生まれた都市ではない。しかし、テクスト化は台北イメージの構築とアイデンティティの形成に寄与した。それは島都が台湾屈指の大都市に成長するうえで必須の過程であった。同様に、満洲事変によって台北の都市圏は大きく拡大したわけ

ではないが、メディアの長期的報道及び日常生活における満洲事変記念活動がなければ、島都は台湾の中心都市とはなりえても、一九三〇、四〇年代の日本帝国の東アジアネットワークに組み込まれる「結節」(nodes)都市にはならなかったはずである。換言するならば、島都は飛躍的に日本国内の重要都市となっていたが、それには「満洲事変を内在化する」ことが必要なステップであった。満洲事変と島都の発展は一見すると無関係な二つの事象であるが、まさにここにおいて興味深いつながりが生じてくるのである。

本論文は最初の二節において、『台湾日日新報』の満洲事変関連報道、及び満洲事変一周年記念活動を手がかりとして、台湾と関係の薄かった満洲事変がいかに台湾人の日常生活ないし身体経験の一部となっていたかを考察する。続く二節において、満洲事変がもたらした国防意識の強化を背景に、台北が迅速に「結節都市」となっていった時、台北の作家林煇焜がその長編小説『争へぬ運命』においてどのように満洲をテキスト化したか、この小説がどのような時事描写を『台湾新民報』の社説と符合させ、時代に対する作家の観察と潜在する輿論を表現したかについて検討する。最後に、いかに台湾が満洲という見知らぬ他者に次第に接近し、「事変の内在化」「満洲のテキスト化」を経たか、すなわち台北における事変の報道、結節都市化、植民都市の批判という三者の関係をまとめる。

一、植民地へ輸出された満洲事変

——『台湾日日新報』の関連報道

長い国境線で朝鮮、ロシア、モンゴルと接する中国東北は、清代中葉・乾隆朝以降、大豆の生産地として、綿花の華中、砂糖の華南と鼎立していた。ここには、もともと暮らしていた満洲族、モンゴル族及びその他の少数民族、清末の開禁後に進出してきた漢民族移民以外に、一八九六年の清露密約によってロシアが中東鉄道開設の権利を獲得して以来、鉄道都市ハルビン^{ハルビン}を中心に、ロシア人、ユダヤ人が押し寄せ、東欧、北欧地域の民族も入ってきていた。一九〇五年の日露戦争終結後、日本はロシアの租界であった旅順、大連及び長春以南の南満鉄道の経営権を引き継ぎ、関東州と南満洲鉄道株式会社を設立した。一九三二年には「満洲国」が成立し、日本の勢力が急速に拡大していく中で、台湾人も東北地域と関係してくる。本節では十五年戦争の始まりである満洲事変勃発後、台湾において、この事件の報道に熱心であった台湾総督府の官製メディア『台湾日日新報』の満洲報道を概説する。

一九二八年の皇姑屯事件以降、中国東北は時代転換前の多事多難の時期に突入した。張作霖が暗殺された後、田中義一首相は「満洲独立」の宣言を要求するため特使を派遣したが、張学良に拒絶された。一九二八年二月、張学良が北洋政府の五色旗を国民政府の青

天白日旗に変えるように命じ、二九日に国民政府の管轄を受ける旨の電報を南京に送り、国民政府は形式的に南北統一を完成した。張学良は東北の最高軍政指導者に任命された。これが歴史上有名な「東北易幟」である。当時の『台湾日日新報』も「東三省改旗」、「南北統一完成」などと、張学良の動き及びこの事件が日中関係にもたらした負の衝撃に注目している。一九三一年になると東北の情勢はさらに複雑化した。五月以降中村大尉事件、万宝山事件などが相次いで起こり、輿論の煽動もあって中・日・朝の関係は日増しに緊張していく。九月一八日夜、日本の関東軍は、中国東北軍の駐屯地北大営附近の満鉄線柳条湖で線路を爆破、これを東北軍の破壊工作と主張、日本軍の守備隊が襲撃されたとして、北大営と奉天（現在の瀋陽）を砲撃した。この事件を中国側は「瀋陽事変」あるいは「九一八事変」と呼び、日本及びその植民地においては「満洲事変」と称し、のちの「満洲国」では「九一八事変」と「満洲事変」の双方を使用した。

事変発生後、国民政府は「不抵抗政策」「国際連盟 (League of Nations) に訴える」という方針をとり、張学良は抵抗しない旨を東北軍に命令した。関東軍とそれを支援する朝鮮軍は迅速に東北各地を占領していった。¹⁾翌年一月に南京国民政府が日本との断交を宣言すると、関東軍は長春から更に哈爾濱に進撃する。同時に満洲への国際社会の注意を逸らすため、国際都市上海において「一二八事

変」とも呼ばれる第一次「上海事変」を起こし、二月には哈爾濱に続いて遼寧、吉林、黒龍江、熱河の各省を完全に占領した。三月一日、「満洲国」が日本の主導で成立し、国民政府に対して「独立通告」を出した。満洲国は溥儀が執政となり、首都を長春に定めてこれを新京と改称し、年号を大同とした。同月、国際連盟から派遣された満洲事変調査団が東北に到着した。九月一五日には日満双方は「両国間ノ善隣ノ関係ヲ永遠ニ鞏固ニシ互ニ其ノ領土権ヲ尊重シ東洋ノ平和ヲ確保センカ為」を主旨とする「日満議定書」を締結した。日本側は「満洲国カ其ノ住民ノ意思ニ基キテ自由ニ成立シ独立ノ一国家ヲ成スニ至リタル事実ヲ確認」し、満洲国側は東北における日本の既得利益を認めた上で、「日本国軍ハ満洲国内ニ駐屯スル」ことを許した。一方、調査を続けていた国際連盟リットン調査団 (Lytton Commission) は一〇月に報告書を公表し、関東軍の行動は「合法的自衛手段」ではなく、満洲国は日本の傀儡政権であると指摘し、中国東北の国際的な共同管理を提案した。国際連盟は報告書の提案を受け入れて、満洲国を承認しなかった。日本は国際連盟の裁定に不満を示し、一九三三年三月に国際連盟脱退を通告した。満洲国は一九三四年三月一日に「大満洲帝国」と改名され、溥儀が帝位につき、年号を「康德」に改めた。中国政府と国際連盟はこれに強く抗議したものの、一方で「満洲国」は以後十四年間にわたり、十数カ国の承認を得ることもなかった。

帝国の南辺境に位置する台湾は、主に新聞報道を通して満洲を知つたにすぎない。二十世紀初頭のロシアによる中東鉄道の建設時から、当時台湾唯一の日刊新聞であった『台湾日日新報』は、常に内地の新聞に掲載された日本政府の言論を転載し続け、東北におけるロシア勢力の拡大を追跡していた。一九〇四年から一九〇五年にかけて、すなわち日露戦争期間中、日本帝国の情報ネットワークの一環として、この新聞の満洲報道は頂点に達した。その後も引き続き、関東州関係のニュースが台湾に入ってくる。一九二八年以降東北の政治情勢と国際関係がますます緊張してくると、皇姑屯事件、東北易幟、中村大尉事件、万宝山事件、満洲事変から満洲国建国、満洲国承認問題、国際連盟調査団、日本の国際連盟脱退、満洲国皇帝の即位、中東鉄道買収、満洲国皇帝訪日、満洲国の関税、台滿貿易及び数年続いた「満洲事変論功行賞発表」などの重大記事が『台湾日日新報』で報道され、空前の長期にわたるブームをなした。

満洲事変後、中日両国は互いに非難し合っており、情勢は不明瞭であった。当時の台湾メディアは、いかに遠く東北で発生したこの国際衝突を報道したのか。現存資料の中でもっともよく保存されている『台湾日日新報』²では、事変発生の翌日、日中両国の代表がそれぞれ被害国の立場から国際連盟に報告を提出したことについて、一字も報道していない。しかし、九月二〇日の朝刊第二面（日本語版）、第八面（漢文版）、夕刊第四面（漢文版）は「日支兵衝突事件」

と題する全面の記事を掲載した。漢文版夕刊の見出しは「満洲に戦雲垂れ込め、戦争が勃発。北大営の中国兵は我が守備隊を襲撃し、我が軍は応戦して北大営の一部を占領」と、中国兵の奇襲、日本軍の自衛、両国の開戦という報道を行った。³二一日に「満洲事変」という言葉が初めて台湾のメディアで使われ、その後固定した用語となる。一〇月四日に台湾軍司令部が発表した「満洲事変の原因」は日本語版と漢文版の両方に掲載され、台湾軍と総督府の立場を初めて宣言した。この宣言は遠因、近因、直接的原因動機という三つの面から「決して事変の突発した其の時に起きた問題にあらずして其の由て来る所は頗る遠く且つ複雑して居」り、中国人の「排日毎日」の諸事件の結果であり、事変後「支那側は頻りに荒唐無稽の説を流布し却つて原因を我軍に転嫁せんとしつ、あるも確証に優る事実なく⁴」と説いた。その立場は基本的に日本政府と一致し、独自の意見表明は見られない。翌日の朝刊掲載の「台日漫画」は珍しく紙面を大きく割いて、「国民政府が排日を煽動」、「各地は国民政府から独立の意志」、「蒋介石、張学良への下野要求が高まる」をテーマとする分かりやすい政治漫画を用いて、国民政府を諷刺・醜悪化した。⁵

一〇月二〇日には日本政府の声明を転載し、満洲における日本の戦争行為が九カ国条約に違反しているとする国際連盟の非難を批判し、日本軍の行為は条約の範囲内での正当な権益を守り、在満日本

人の生命と財産の安全のための行動であり、戦争行為と見なすべきではなく、日本側も平和的解決を熱望しており、領土的野心は一切持たない、と主張した⁶。台湾総督の太田政弘が予算協議のため上京した際、一月一三日に神戸港に入ると、島内の事情を取材する内地のメディアに対し、まず東勢郡管轄下の原住民が警察駐在所で起こした殺人事件について説明し、その後、満洲事変に言及して「満洲事変は誠に遺憾であるが、島内への影響はない。在台華僑は本国内における排日の影響で通商が不可能となったため、国内の不安定を嫌がり帰化を希望する人が多い」ということだけを語っている⁷。

この時期、満洲の主要都市を相次いで占領した日本軍は、満洲事変後に遼寧省錦州に移駐した張学良軍への攻撃を計画していた。しかし、台湾総督府の主要関心事は原住民の抗日反乱事件であった霧社事件から一年を経た台湾各地の原住民の動向にあった。このことから満洲事変後、台湾の中国人社会はなお安定を保ち、当局を困らせる状況は出現していなかったことが分かる。

一九三七年以前には、台湾の各メディアは満洲に記者を派遣してはいなかった。しかし、一九三七年九月二〇日以後は東京、大連、奉天、新京、哈爾濱など各地の電報の転載あるいは編集を通して、日本の軍事行動、国民政府の動向、東北各地の治安、排日活動、経済貿易の状況、国際社会の態度、満洲国の建国、満洲国承認問題などに『台湾日日新報』は頻繁に報道している。一九三七年

の蘆溝橋事件（七七事変、日中戦争⁸）後は、満洲の動きも華北、華中、華南などの軍政情報に組み込まれていった。一九四一年の真珠湾攻撃後は東南アジア、南洋などの戦況が大量に紙面に登場し、満洲報道は次第に簡単なものになっていく。満洲事変及びその後の社会変動に関する報道は、長期間朝刊第二面と夕刊第四面の国際ニュースの大部分を占めたほか⁹、他の面に散在することもあった。ニュースソースと報道内容から見ると、台湾の満洲事変関係報道は主に内地の日本政府の立場に応じ、内地あるいは満洲の日本人が経営する新聞の言論を伝えるものであった。国際ニュース面の記事の多くは、実際には日本帝国の植民地、国際連盟委任統治領、傀儡政権、日本軍占領地区など諸「外地」の新聞報道であった。

日本の内閣、陸軍省、『朝日新聞』及び満洲地域の日本新聞の論調が、当時の台湾の新聞の満洲輿論の方向を決定した。満洲国、関東州、華北、上海あるいは熱河・綏遠・察哈爾などの隣接地域の重要な戦況、時事ニュース、国際社会の動向及び事変に対する日本の内閣及び軍部の声明や情勢分析が、当日あるいは翌日には漢文版に翻訳・転載・略述された。一九三一年一月末から『台湾日日新報』は満洲の戦況写真を掲載し始め、一二月には「満洲事変画報」と題して、各地で活躍する日本軍の勇猛ぶりや戦没者の写真を掲載し¹⁰、それらが一面全体を占める日もあった。戦地の写真が掲載されたことは、満洲占領に対する日本軍の自信の表れであると同時に、

台湾当局が島内の民心が安定していることを認め、それらの情報に刺激・影響されることがないと判断していたためであった。

一九三二年二月五日に日本軍は哈爾濱を占領し、満洲全域を支配下においた。その後、張景恵らが一日に「新国家建設準備会」を開催し、一日には「独立宣言」を発表した。この時期から、台湾における満洲事変報道はさらに直接的で普遍的な映画によって行われる段階に入っていく。一六日夜、台湾日日新報社は台湾軍が提供した満洲事変及び各地の戦況に関する陸軍省の映像四巻、上海事件、都市上海すなわち南方風景の映像数巻を、二月一日に台北市の建国祭において上映された映像とともに、民衆が集まる台北新公園、大稻埕媽祖廟などで、初めて野外上映した¹¹⁾。これを嚆矢として、満洲事変、上海事件に関する映画はセットになって上映され、台湾の各都市では上映ブームが起こった。

上述のように、政府筋の情報、戦況ニュース、政治漫画、戦地の映像と事変関係の映画や『台湾日日新報』は、台湾民衆が満洲事変、満洲関係の情報を知るための主な手段となっていた。台湾の立場と見解を前面に出さない「転載型の報道」が、この新聞の満洲報道の最大の特徴であった。しかし、それらも台湾軍の視点と南方的な視野が加わることにより、徐々に変化していく。一九三三年九月一八日に、『台湾日日新報』の各面に首相、関東軍司令官、陸相、外相、侍従武官長、台湾軍司令官の発言が掲載された。このう

ち、共存共栄、「日支」親善、王道楽土、東洋の永久平和などの論調が台湾軍司令官談話に見られる。台湾軍司令官松井石根中将は満洲事変を回顧し、「日本同胞が流した赤誠の血は満洲国独立の果実を实らせた」、「東洋の永久平和は世界平和の基礎である」、満洲事変及びその後の発展は「天意天命」に基づいた「天業恢興」の「大精神」の表れであることを強調し、島民はこのような精神を保持し、帝国の「一視同仁」の治下で、「南支地方」(南中国)における台湾の役割をよく果たし、帝国の「南門を守衛」する重要な責任を担うべきである、と呼びかけた。同時にこの面では「満洲事変及び其後に来れるものは、天意天命に基く、天業恢興の大精神もて、島民よ！「南門の守」を完うせよ」、「風雲は西より南へ！ 眠れる台湾よ、目を覚ませ、経済機構を組成せよ、空陸海国防を完備せよ、内台人結束一元となれ」といった煽動的な見出しで、台湾軍司令官の談話を掲載した¹²⁾。

満洲事変は、民衆国防に対する台湾軍の意識を強めた。台湾軍側の発言は、満洲事変二周年記念前夜に東京で発表された斎藤実首相の「共存共栄」、「東洋永遠和平」及び元関東軍司令官本庄繁の「日滿国民協力融合」、「民族団結」などの論調を主としているものの、台湾総督府は日本内地及び台湾人の満洲への強い関心を見て、一九三三年から双方に向けて台湾の南方における役割を宣伝し始め、「日本の生命線」は南方に移り、満洲の情勢はもはや心配する必要がな

いことを暗示した。台湾軍も地元の見方で満洲事変を解釈し始め、しかもそれを実際に台湾の防衛宣伝と南方の国防教育に活用した。この傾向は一九三四年から事変五周年目の一九三六年にかけて、さらに顕著になった。台湾軍司令部と台湾国防議会連合本部を中心とする記念活動の主催者は、この年から正式に「本島の国防的地位を認識する」ことを記念活動の目標の一つにし、台北市防衛団及び地域防衛団を組織し、第一連隊による攻防演習、台北市の市街戦演習を実施した。¹⁵

一九三七年の六周年記念に際しては、『台湾日日新報』第二面は蘆溝橋事件が引き起こした華北、華中の戦況報道で占められ、満洲事変記念日の活動は短い便りの形で挿入されているだけである。毎年、台湾の各都市で行われる「満洲事変戦病没者慰霊祭」への参加者は依然として数千人あるいは一万人余に達したが、中国戦線における日中両軍の激戦が進行中のため、慰霊祭は各地の神社内で新たに興された「皇軍武運長久祈願祭」とともに定例行事となっていた。同年九月一八日からの三日間、新聞、ラジオなど様々なメディアを通して報道された台湾軍参謀長の講演「満洲事変より、支那事変へ」も、記念日活動を日中戦争の戦況と結びつけた典型的な例である。この講演は満洲事変とそれによって築かれた共存共栄、東亜の平和の理想を略述した後、「中国の民族性は極めて狡猾」、「共産党の魔手が背後で操縦」などとして日中の戦況の進展を論じ、国民

政府を批判し、実力を用いて「支那を膺懲する」ことこそ、事変を解決する鍵であることを強調した。¹⁶この時期にはまた、特殊な報道が現れた。満洲事変に参加し、日中戦争に再び出征して戦死あるいは重傷を負った台湾出身の兵士（在台日本人）に常に注目し、「名誉の戦死」とする報道である。¹⁷満洲事変記念日への報道規模が縮小しただけではなく、報道の焦点と話題の展開も日中戦争へと移っていったのである。¹⁸

一九四一年の満洲事変十周年に際して、最後の報道ブームが出現する。九月初頭、東京において駐日満洲国大使館が率先して帝国内における最初の満洲事変記念及び承認祝賀会を開催した。当日、日本在郷軍人会は満洲各地で演習を行い、日本本土、朝鮮、台湾と中国の占領地域、広東においても、同時に盛大な記念活動が行われた。記念特集を組み、満洲事変に対する政府の見解、時局との関わりを宣伝しようとしたのがこの年の報道の特色である。特集「満洲事変の真の意義」は台湾総督府情報部副部長であった荒木義夫によって書かれた。「東亜の東亜！ 民族解放の聖戦」、「新秩序の建設、英米植民地化の積弊を一掃」、「共栄圏の確立、時難を強固に克服する決意」等をテーマに三回に分けて連載した。日中戦争は民族と民族の対立ではなく、欧米諸国の傀儡政権である蔣政権を膺懲し、東亜民族の解放に寄与するものである。それは東洋文化と東洋道義に基づいた東亜新秩序が、自由主義と帝国主義に基づいた旧秩

序に対して発した挑戦であり、東亜からの欧米勢力の一掃と東亜民族の解放を目的としている、と荒木は強調した。

特集「満洲事変十周年の思ひ出」は、台北陸軍兵事部石川少佐による戦況回想である。朝鮮軍に服役していた彼は、事変後に戦争支援のため中国東北に派遣された。「悲壮！ 軍旗焼く決意 古賀連隊長乗馬突撃に散る」、「敵兵は常に十、廿倍 事変が共栄圏建設の序幕」、「清朝復古」を歓喜 謳ふ王道楽土に感無量」、「廿倍の敵忽ち撃滅 銃後の協力が何よりの武器」などをテーマに六回にわたる連載を組んで、満洲事変を「共栄圏建設の序幕」だと評価した。²⁰

上述のように、数年の間隔があり、非連続の事件であった満洲事変と日中戦争は、満洲に対する国際連盟の処置、米英が日中戦争において日本に圧力をかけるなどの点において、関係づけられた。これらの言論が示しているように、太平洋戦争直前に台湾政府は満洲事変記念行事の教化性を拡大し、満洲事変そのものから長期化した日中戦争、米英との緊張関係などの当面の問題に焦点を移そうとした。このような議論の中で、満洲事変は日中戦争の先駆と見なされ、その後起こった日中戦争とともに、東亜民族解放の聖戦における連続した歴史事件として理解された。

一九四二年、満洲事変十一周年の際には、すでに太平洋戦争が始まっていた。一九四一年一二月に日本軍に占領された香港が、初めて満、日、台、朝などでの記念行事に参加した。九月一五日の「満

洲国承認記念日」には関係する報道が出現しており、満洲国では、溥儀皇帝が自ら十周年慶祝式典に臨み、国務総理張景惠は「懐旧」という言葉を使って「匪賊の地は今やすでに王道楽土となった」と

説いた。朝鮮では、満洲事変当時、関東軍参謀長であった朝鮮総督小磯国昭が、「満洲国の今日の盛栄は共栄圏の指導原理を証明」したものであると述べた。この他、同じ紙面に南京汪精衛政権の「清郷工作」が順調に展開され、大東亜省官制がまもなく通過するニュースが報道されている。²¹ それまで日本帝国が画策して各種民地、占領地に強制してきた満洲事変記念日は、いまや「大東亜共栄圏」共通の祝日ともいべき状況になっていた。蘆溝橋事件、真珠湾攻撃後、「世界史的意義」から情勢の変化を見るという当時流行の視点は、「満洲事変の世界史的意義」という談話を通して、満洲事変に対する政府の評価として表れた。²² 記念日関係の報道は一定の紙面を占めてはいたものの、満洲事変自体に関しては「満洲国に感謝」、「盟邦の発展を慶祝」などの短い言葉が見られる程度で、「大東亜共栄圏の確立」、「世界新秩序への邁進」、「恤兵献金」、「全島の必勝決意を激発」など当面の課題に集中するようになっていた。²³ 一九四三年以降の数年間は、満洲事変という単語がほとんど新聞記事に現れなくなり、事変の記念活動も報道されなくなる。太平洋戦争中、日本軍はマレー、シンガポール、フィリピン、ビルマ、インドネシア、ベトナムを陥落させた後、戒厳令を布く一方で、「白人植

民地を解放、互いの独立を尊重」、「共栄圏の独立国」などのスローガンを掲げ、フィリピン、ビルマ、インド、ベトナムといった諸国に対し、米英仏からの独立を煽動した。一九四三年八月、満洲国はビルマの独立を承認した。フィリピン独立（一〇月）の直前であったため、九月の満洲関連報道の焦点は「満洲国承認記念日」に移り、満洲国「独立」の意義、独立国家として認められた十年間の富強と発展を強調した。²⁴ 過去の報道とは比較にならない規模の「満洲国承認記念日」報道は、日本が南方占領地帯各国の「独立」を策動したこともあって、「満洲事変記念日」に取って代わって満洲報道の最新の議題及び最後の象徴となった。²⁵

以上をまとめると、『台湾日日新報』の転載型の報道は、当初は戦況の進展、満洲国建国、満洲国承認、日満友好を主とし、後には「満洲事変記念日」及び「満洲国承認記念日」を中心に行われた。異なるトピックがあてられる焦点とその象徴的意味を通して、満洲事変とそれに関連する国内あるいは国際情報が集中的に台湾で紹介された。一九三一年から一九三七年の間は、満洲事変への報道ブームが継続して高まり、日中戦争及び太平洋戦争勃発後にはメディアの視線が変化するにつれて徐々に冷めていく。関係報道はプロパガンダ化、周縁化、空洞化していくが、王道楽土、共存共栄、東洋和平という東亜の範疇から、大東亜共栄圏、世界新秩序の建設における世界的意義に至るまで、満洲事変に投影された象徴性と意義は拡大

していったのである。

二、満洲事変を契機とする事変記念日と満洲の内在化

以上、満洲事変とその後の関係報道に対する検討を通して、台湾最大の植民地報道機関の傾向を概観してきた。日本政府の見解を伝えることを通して、満洲事変が満洲外部の東アジア、東南アジア、南洋、そして世界へと拡大していった過程を確認することができる。満洲国が安定した後は重大な軍政、外交事件が減少し、メディアの満洲報道の中心は事変記念日となった。しかし、台湾における「満洲宣伝」はメディア単独の意図的な行為というよりも、むしろメディアと国防意識を強化しようとする台湾軍及び在郷軍人会支部などの団体が協力して行われた結果である。満洲事変が契機となり、全台湾演習と国防教育は新たな根柢を得た。島民の国防意識と防衛能力の向上を机上の空論にとどまらず、身体的な動員、感覚的な刺激、感情的な準備が求められた。一日二回朝夕刊行される新聞の報道は、この事件を時間的に延長し、空間においても共時的な展開を見せ、更に文字情報と放送とを結びつけることで帝国と諸外地の情報交換を加速させ、日本政府のイデオロギーの伝達と愛国教育において特別な効果を果たした。本節では記念日行事を通して、満洲事変がいかに台湾民衆の時局認識を作り上げ、日常生活に浸透していったかについて検討していく。

一九三二年九月一〇日、『台湾日日新報』は、九月一日を「国難記念日」に指定し、全国で記念行事を行う、という中華民国政府の命令を報道し、これが全国的な排日運動を煽動する恐れがある、と指摘した。²⁷一方、日本国内ではこれより早く、同日を「満洲事変」の記念日とする活動が始められていた。前述したように、満洲事変後、台湾で開始・実施された記念日は二つある。一つは「満洲事変記念日」（九月一日）であり、今一つは「満洲国承認記念日」（九月十五日）である。一九三二年に始まった満洲事変記念日は、市街庁政府、郷軍台湾支部と地方訓練団体を主体とし、台湾軍を後援者として、毎年全島の各都市で記念行事が挙行された。一九三七年の蘆溝橋事件までは、記念行事の規模は年々拡大していた。戦争の拡大後は、行事の内容と報道の方向は、国防の議論に従って変化したが、一九四二年に至るまで、常に集中的に報道される重要な行事であった。関係報道は毎年『台湾日日新報』の紙面を大幅に占め、記念日前後の十数日にわたる連続報道が行われ、各地の準備状況は一カ月前から注目されていた。このような「連続報道」に比べ、一九三三年に始まった「満洲国承認記念日」では盛大な行事は行われず、新聞においても一、二本の記事しか載せられなかった。事変記念日に近かったこともあり、一九四三年に東南アジア諸国の独立と結び付けられるまで、それは事変記念日の関係報道の一部に過ぎなかったのである。蘆溝橋事件後、日本政府は一九三八年に「支那事

変記念日」を設け、全国での一分間の黙禱、各機関団体での式典、講演、献納と勤勞奉仕などの記念活動の挙行を要求した。²⁸その後、この記念日は日本の植民地、満洲国、北京、上海、南京、アモイなどの日本軍占領地域においても実施されたが、台湾では行事の規模は満洲事変記念日よりもはるかに小さく、報道も簡略であった。それに対し、太平洋戦争の導火線であった「真珠湾攻撃」に対しては、日本側は奇襲、空襲、強襲と称し、開戦行為と見なしている。従って、一九四二年からは全島範囲で「大東亜聖戦開戦周年記念」あるいは「宣戦周年記念」の名義で記念活動が挙行された。次第に戦局が難航し、紙の使用が制限されたため、報道も簡略で集中的となった。三者を比較すると、日本統治時代の台湾では「満洲事変記念日」が最も盛大に報道され、活発に記念行事が行われた戦争記念日であったといえる。²⁹

一九三二年の第一回目の記念日から、『台湾日日新報』は最も精力的に「満洲事変記念日」の報道を続けた台湾メディアであり、「台湾人の代弁者」と呼ばれる『台湾新民報』はそれには及ばない。³⁰八月下旬より各地における準備の様子が報道され始め、九月以降はほぼ毎日のように関係のニュースが報じられた。もつとも活発に準備が行われた屏東街の様子が最初に報道された。この地では郷軍と地方の有力団体の支援の下で、警備演習、軍事講演の挙行を発表し、参加者五百余人、宣伝用のチラシを一万五千枚配布したという。³¹他

の都市もそれに劣らず、基隆市では防空演習と新兵器展示を行い、台中市の郷軍、青年団それに学生は連合して「北大宮戦争模擬戦」を行った後、六千人からなる行列で神社に参拝した。台南市では警備演習を行い、屏東連隊が応援の飛行機を派遣し、行事が終わった後市内で行列を行った。宜蘭庁では演習後、宜蘭神社に参拝し、各小学校、公学校が慰霊祭を行った。台東街も慰霊祭を行った。報道を見ると、九月一八日当日に主要都市ではすべて早朝演習、市街行列、神社参拝、慰霊祭などの行事が举行され、夜には事変講演と事変映画上映会を開いていたのである。

台湾の各都市のうち、「烏都」台北の記念行事は最も盛大であった。記念活動は一七日の夜七時から始まり、台北帝国大学教授の今村完造及び経済界の著名人による「日満両国の精神結合」、「東洋平和大精神」などの講演、映画上映会には市民が自由に参加できた。一八日午前六時に対敵非常演習、七時に新公園で慰霊祭が行われ、官吏、軍人、郷軍、警察、青年団、専門学校生、高中小学生、社員など計一万人以上が参加した。九時に総督府総務長官が参列し、その後、この年の前半に台湾民衆から集めた兵器献納金で作られ、「都市の防空」と標榜され、「島民赤誠の発露」と喧伝された軽爆撃機「台湾愛国号」二機が市内の上空を旋回した。一万人以上の民衆は市内で兵隊の行進に随い、「満洲行進曲」が一日中流された。夜七時には新公園で事変当時の従軍軍医監と台湾日日新報社社長が

「哈爾浜から帰ってきた」、「満洲と台湾」等の講演を行い、再び事変映画会が開かれ、参加者は五千人余であったという。³²⁾

一八日の『台湾日日新報』第二面には、斉藤首相の講話「確固たる信念、更なる努力」が掲載された。第三面は全面が記念日特集で、関東軍司令官兼駐滿特派大使、関東軍参謀等による日滿民族協和、満洲建国大業などの談話を掲載し、島都、台南、台中、嘉義、屏東、台東、宜蘭の各地の活動を報道した。このほか、当時一番迅速なメディアであったラジオを利用して、台北放送局（JFAK³³⁾）が初めて新京の演説を「特別中継」の形で、台湾全島に向けて放送した。午前一一時五〇分から関東軍司令部付、満鉄鉄道修理班長などによる「柳條溝鉄道破壊情況」に関する証言的な演説、夜八時三〇分からは満洲国執政溥儀と陸軍大将武藤信義の特別講演が放送された。他にも北大宮の軍事講演の特別中継、東京の慶祝活動の報道と中継もあり、台湾各地の記念行事及び台北新公園の夜間講演も一日中続く記念放送の間に挟んで放送された。

一九三三年、満洲事変二周年記念の一カ月前に、東京で盛大な記念行事が行われるとの報道がなされた。³⁴⁾台北、島内の他の都市及び離島馬公の準備状況も報道された。東京からの情報として、東京放送局が陸軍の支援を受けて「日満連絡満洲事変記念放送」を行う旨が報じられた。当日、哈爾浜において満洲事変勃発当時の独立守備大隊長の回顧談が放送され、その後、奉天の「北大宮模擬戦」が中

継放送され、夜には東京から関東軍司令官の講演及び日比谷公会堂の在郷軍人会の事変記念大会講演が放送された。³⁵この年も例年通り慰霊祭と記念講演が行われたが、軍事演習は行われなかったため、全島の記念活動は前の年より縮小したかに見えた。が、それにもかかわらず、活動の内容は更に柔軟になり、島民の生活になじんでいた。例えば、台北市においては愛国婦人会による日華事変関係者慰安会が開催され、新公園音楽堂は夜になると事変関係のレコードを放送し、大稻埕媽祖廟及び萬華龍山寺などの台湾人生活圏では事変映画会が開かれ、高雄市では女学生手作りの慰問袋千五百個と全市で募集した物資で慰霊祭を行い、高雄の満洲出征兵士の家族に慰問金を送っている。³⁶

一九三四年の満洲事変三周年記念も同じように一カ月前から報道が始まり、規模は最初の二年より盛大になった。まず島都の行事予定が報道され、各地の準備状況も頻繁に掲載された。³⁷台北市では例年と異なり、台北市と郷軍台湾支部が主催者となったが、台湾軍司令部も企画に直接参加し、この年六月の「台湾軍特種演習」の防空訓練がよい効果を得たため、防空演習の灯火管制の訓練を特別に増やした。訓練の範囲が全島に及ぶ行事であったため、実施前から新聞紙上で頻繁に宣伝された。³⁸一八日午前には、台北新公園に祭壇を設けて慰霊祭を行い、総督が引率し、参列者は二万人に上った。³⁹その他の都市では、台中市の模擬演習で攻防の両軍が激戦し、花蓮港

庁では市内掃討戦及び閱兵分列式が行われた。基隆市では花火を合図に、各団体旗隊が市内の各方面から集会場所へ向かい、蜿蜒たる長蛇の列をなして市内を巡回した後、万歳を三唱して解散した。参加者は総数七千人余に達し、青年騎馬ラッパ隊、龍舞、変装団、変装高足踊、漫画など、民衆に歓迎されるような新演目が増やされた。⁴⁰屏東飛行連隊は野外飛行演習を行った。台湾愛国号四機が全島を巡回し、屏東から嘉義、台中、新竹、台北、基隆などの主要都市を訪問飛行した。台北、新竹、彰化、鹿港、嘉義を経由して屏東に戻る経路であった。⁴¹一八日夜には島民が「常時記念し、時局決意及び信念の強化に資する」ため、夜九時半から台湾全島で事変の夜を模擬して「非常管制」を実施した。電力会社変電所は一時街灯への電力供給を切断し、民衆は言われた通りに黒い布や紙で室内の光を覆った。「全台湾五分間の暗黒」に合わせ、同時に大規模な交通と音響の管制も実施された。⁴²

このほか、一八日の『台湾日日新報』第二面では、トップニュースとして昭和天皇の二番目の弟・高松宮親王が一週間にわたって訪満し、新京で満洲国皇帝と会見してともに事変三周年を祝う予定と報じられている。二人の姿が映った写真が添えられたこの報道は、今回の会見が国民に両皇室の親和、日満両国の固い提携、東洋の永遠の平和といった深い意義を示したと指摘した。高松宮親王が乗り込んだ連合艦隊は、金剛を先頭に六十隻余の軍艦が随行する大艦隊

で、一八日に大連港に入港した。連合艦隊の訪問は満洲国建国当初の巡航に次ぐ第二回目であったため、「全滿待望」の盛挙として報道された。日満皇室の会見のほかに、艦隊司令長官以下の将校が「大陸生命線の満洲」を視察するため、百二十機の艦載機飛行大隊を編成し、「全満洲の空を覆い、各地の訪問飛行を行った」⁽⁴³⁾。また、

一八日に東京で発表された首相と陸相の訓示、関東軍司令官の新京における講話及び台湾各地における記念行事は一九、二〇日に続々と報道された。満洲事変後、義眼、義肢を重傷の将校と公使に下賜した香淳皇后が、再び包帯三百巻を関東軍の負傷兵に下賜するニュースも台湾に伝えられた⁽⁴⁴⁾。

一九三五年の満洲事変四周年記念は、郷軍台湾支部と国防義会の主催で行われた。例年の行事以外に実戦の経験談、防護演習、陸軍の満洲再認識の宣伝冊子の配布も行われた⁽⁴⁵⁾。飛行機による市内上空の訪問がこの年の特色であった。折しも「始政四十周年記念台湾博覧会」が台北で開催されており、事変の記念活動に対する大規模な市民動員はなされず、報道も博覧会ニュースのために過去ほど目立たなかったが、それでも全島で行事は行われ、そのうち台北市の活動がもっとも盛大であった。一七日からの三日間、昼は小、中、高校で「満洲上海事変実戦講演会」が行われ、夜には各郷軍分会による「現役軍人実戦談」が開催された⁽⁴⁶⁾。一八日の夜は記念活動のクライマックスで、全市を城内、城西、城南、城北、大稻埕、萬華、大

成の七区に分けて、防護演習が行われた。郷軍、青年団、青年訓練所、少年団など一三〇人余が救護、警報、避難所管理、補助消防、補助消毒の各班を組織し、敵機の襲来を想定し、警報を鳴らし、市内全域を警戒した。漢文版は「島都防護演習」と題する記事で実況をリアルに報道している。

暗い夜中にサーチライトが照らされ、白昼の如し。八時二〇分、台日社前及び龍山寺が出火。太平町菊元本店前、千歳町市場前、栄町新高堂前の三箇所、敵機を装った飛行機が爆弾を投下、水道管を爆破した。太平町、新世界前、東門町、軍司令官官邸、永楽町各派出所は毒ガスなどが投下された場合の対応をした。一時、全市は災難にまみれた。各防衛団が大活躍して作業を行った⁽⁴⁷⁾。

演習は二時間ほどであった。軍が各地に設置しておいた山砲、歩兵砲、機関銃を一齐に発射させ、防護団員が起立して一分間の黙禱を行った後、警戒が解除された。台湾南部においても、台南市がこの日の夜一〇時に爆竹を鳴らし、機関銃の発射と花火の打ち上げを合図に、二時間の模擬市街戦を挙行した。「一般人にも軍備の充実と国防の周到を知らしめる」ために、全市に通告し、当時としては珍しかった民間のトラックを指定時刻に集合させ、演習軍隊の輸送

と行列への参加を命じた。夜一二時に演習が終了し、行列と車が揃って台南神社へ参拝に赴いた。⁴⁸花蓮港庁では港から上陸した仮想敵軍との間で、雨中壮烈な攻防戦が展開された。秋風が吹く馬公では、雨天にもかかわらず小学生が昼間の旗行列に参加し、夜九時半から一時半までは灯火管制が実施され、澎湖外島でも「国防前線の意気」を顕示した。⁴⁹

一九三六年の満洲事変五周年記念では、陸軍省が依然として満洲事変の民衆国防教育に力を入れ、台湾軍司令部、国防義会、郷軍台湾支部、守備隊司令部、飛行連隊を中心とする団体が、例年通り各種の活動を催した。この年の行事のポイントは、青年団員を中堅とする過去数年の記念演習で積み重ねた経験によって、「台北市防衛団」や全台各地の「防衛委員会」を組織し、記念日当日に全島で結団式を行ったことである。「輝かしい南方生命線」がこの年のスローガンであり、「文武一体、官民一致」の防衛精神を発揚するため、市街攻防戦が各都市の恒例行事となっていた。⁵¹全島で国旗掲揚、防空救火演習、航空常識に関する講演も重視された。この他、軍飛行機による都市訪問飛行の規模はさらに拡大し、爆撃機中隊、戦闘機中隊、合計九機が異なるルートで各地を訪問し、台湾全土の都市及び離島の住民に、望見、追いかけて、そして歓呼の機会を与えた。

以上をまとめると、日本政府、陸軍省は東京、新京という二つの

首都を軸に、「満洲事変記念日」を台湾、朝鮮、中国の占領区に拡大し、「東亜の共同記念日」に置き換えようとしたことが分かる。

台湾軍司令部、郷軍台湾支部とその他の関係団体は、具体的に「満洲事変を忘れるな」、「台湾防衛の強化」という趣旨を貫徹させようとした。最初の事変映画の野外上映、千万人の慰霊祭、旗行列、神社参拝から、北大宮模倣戦、暗黒五分間の記念の夜、集団黙禱、国旗掲揚、市街攻防戦、消防救火救護演習、全台防衛団の結成を通して、満洲事変は外部の傍観事件から内部の身体経験へと変化していった。身体五感に訴える集団演習によって「事変を記憶」させようと台湾人を動員し、事変の模倣と復習を通して、台湾が侵略された場合の危機感を作り出す。「満洲事変を契機」に国防意識と動員能力を高めることが、台湾総督府の「満洲事変記念日」活動の趣旨であったといえよう。

輝ける九月、神聖なる「九一八」が近づくと、児童から青、中、壮年まで幅広い年齢層の全台湾民衆が、遅寝早起きして事変を回顧し、カーニバルのような国防式典に参加する。記念活動とラジオ、新聞、宣伝冊子などのメディアを通して、台湾の隅々にまで浸透したこの祝日は、満洲事変と上海事変に結びつけられ、国際都市上海の空襲の経験と危機感をも台北に注入した。台北が攻撃されるといふ想定は、演習活動の中でどんどんリアルさが加味されていく。普段、市民が立ち寄る繁華街、一九三二年一月に竣工・開業した菊

元百貨店、新世界映画館、新高堂書店前は、市街攻防戦の危機一髪の戦地となった。これに従い、島都に倣って記念活動を行う他の都市はもちろん、遠く離れた離島でさえ、国防の最前線という仮想に包まれていった。

新聞などの印刷物、ラジオ中継、軍事演習、公共講演、軍歌放送、事変映画があり、市街行列と神社参拝が行われ、いたるところ「日の丸」旗で埋めつくされた。台北を中心に、官民大衆、地元有力者はもとより中小学生の間にも普及した全島行事は、遠く東京、新京と直接結び付けられた。台湾本島から離島の各地における演習をとおして、満洲事変を経験しなかった台湾人も郷軍団体及び官庁政府の指揮に従い、事変を模し、戦没した皇軍を弔うようになっていった。人波がこつた返す中、白黒映画、ラジオ中継の北国の戦地映像を目に、耳にしながら、北大営の砲煙戦火に思いを馳せ、今まで見ることでできなかった魔都上海の姿をあっけにとられて見聞きしていた。白昼に轟音をどどろかせて訪問機が都市から都市へと飛んで行くのを仰ぎ見て、夜は全台湾を挙げて、北大営が爆撃された夜の暗闇を体験する。人々は堂々と、気軽に大勢が行列し、歓呼し、黙禱し、帝国の何億の国民臣民と同時に慰霊をし、夢幻の満洲新国家、王道楽土へ敬礼を送り、内地と満洲の「大人物」の特別放送を初めて耳にしたのである。台北、上海、東京、新京、哈爾濱、奉天から、台湾のメディアでは報道されなかった朝鮮・京

城などの各地の活動まですべてが事変にちなんだ祝日として、帝国内の同時的な慶祝ネットワーク、想像上の運命共同体に編入されていった。

植民地版の「一九一八を忘れるな」の行事は、同時期の中国での行事の趣旨とは大きく異なっていた。台湾社会とはほとんど無関係の事件が全島を挙げて慶祝されたのと同様、「満洲事変記念日」は正に「離地性の（現地を離れた）」祝典であり、典型的な植民地記念日であった。しかしながら、対立感情を呼び起こす記念行事、本土民衆の危機感の動員は、毎年全島で繰り返される演習のプロセスを経ることによって、もはやただの形式的な記念日ではなくなっていた。それは日本全土、朝鮮植民地に漲る同時代の雰囲気へとつながる台湾の「満洲ブーム」を生産する重要な場であった。台湾の在地的な見方を欠いた転載による満洲軍政情勢報道、あるいは国際情報に比べて、一般民衆の間に満洲事変周年記念行事と南方防衛宣伝が浸透したことは、日常生活に対する満洲事変の影響を身近に感じさせた。自主的か強制か、意識的か無意識的にかかわらず、「満洲事変周年記念」は当時の台湾人が満洲に近づき、満洲を感じ取り、満洲を想像する方法となっていたのである。

三、台北市の「カフェー満洲」——満洲のテキスト化

前述したように、祝日 (holiday) 化の操作によって、満洲事変記

念日は一種の祭典となった。事変は冷めることなく、海を渡り、南の島で再燃した。帝国の領有地の中で、「満洲国」を除いて最大の中華の土地である台湾に対し、台湾の統治者は意識的な精神教育によって、植民地民衆の対満洲輿論と満洲認識を導いた。特定の報道と輿論のもとで、満洲事変の台湾における在地化を促し、それを島民の常識と感情の中に導入することにおいて、満洲は幾らかの役割を果たした。台北市は全島の都市防衛システムの中心となり、東アジアの中で攻撃される可能性が高い都市の一つであると宣伝され、国防の色彩が濃厚となった。三〇年代初期にはメディアが注目する島都の議題が文学作品に投影され、満洲を題材とする作品も現れた。これらはすべて「満洲内在化」の連鎖反応であった。

一九三〇年代初期の日本の政局は極めて不安定であった。三二年一月には朝鮮独立運動の活動家李奉昌が、閲兵式終了後帰途につく昭和天皇へ手榴弾を投げるといふ「桜田門事件」が起こった。二月には急進的な右翼が「私欲に心酔し、国防を軽視し、国利民福を顧みない凶悪な輩」を襲撃の対象とする「血盟団事件」を起こし、前大蔵大臣などの要人を連続して暗殺した。五月一日には平民出身で、日本憲政精神の象徴でもあった首相犬養毅が海軍軍人に暗殺される事件が起こり、朝野を震撼させた。この「五一五事件」は大正デモクラシーの中で成長してきた政党政治を破壊し、政党内閣はここに終止符をうったのである。⁽³²⁾ これらの事件の成り行きに『台湾日

日新報』は注目したが、事件当時の報道はかなり簡単なものであり、報道の焦点はやはり満洲事変後の進展と国際的な動向に絞られていた。

輿論の主流に制約された状況の中で、台北の市民生活を反映し、台湾人の輿論に関心を持ち、同時に満洲の動向にも触れた島都の小説は、われわれに当時の台湾人の思考と感情を知るための視角を提供してくれる。林煇焜（一九〇二—？）の日本語長編小説『争へぬ運命』⁽³³⁾はそのような小説の代表作の一つといえる。いまだこの小説は、通俗文学あるいは都市の現代性といった見方からのみ批評されており、⁽³⁴⁾ 満洲事変のテクスト化という特徴は、いまだ指摘されていない。この点が本節において注目するポイントである。以下、濃厚な都市風俗と市民的な色彩を有するこの物語の背景と内容について、簡単に整理しておく。

『争へぬ運命』は一九三二年七月から七カ月にわたって、『台湾新民報』に計百七十回連載された。作者林煇焜は京都帝国大学経済学部⁽³⁵⁾の卒業生で、当時は淡水信用組合の専務理事であった。留学帰りの青年が台湾社会に溶け込んでいくという作家自身の経験を記述の主軸とし、運命に翻弄される二つの結婚悲劇がテーマとなっている。作者は広い視野をもって、新時代の気風と伝統習俗とが相俟って混沌とした「過渡期」（三二二頁）における台北人の生活の多面性を描く。小説は霞海城隍の生誕記念の前日、広口商社の跡地にあ

る「カフェー満洲」から始まる。連載第一回は、「満洲国へ行つて
 ルンペンになつちや、困るでせうが、カフェー満洲なら、大丈夫
 よ」と書かれ、また旧暦五月一三日の「大拜拜」にも触れられてい
 ることから、具体的な日には一九三二年六月一日であることが
 分かる。一九二八年六月四日、北洋軍奉系軍閥の首領張作霖が乗っ
 た北京から瀋陽行きの特快列車が、早朝に東北軍閥が運営する京奉
 鉄道と満鉄線が交差する皇姑屯附近を通過した時、関東軍が埋めた
 爆弾により爆破された。田中義一内閣は張作霖爆殺事件に直面した
 が、事件の処理過程においてさまざまな問題を誘発したため、一九
 二九年七月に二年あまりで辞職した。その次に濱口雄幸内閣が登場
 した。

一九二九年は世界経済大恐慌が始まった年である。一九三〇年に
 なる世界的に物価が暴落し、濱口内閣は一月に金輸出解禁を実施
 し、国内経済を保護しようとした。各国も関税保護政策を実施し、
 関税戦は改めて世界信用恐慌を巻き起こした。一九三一年九月には
 イギリスが金本位制を停止し、これを契機に犬養毅内閣が成立、一
 二月に金輸出再禁止を実施した。こういった連鎖的な世界経済危機
 は台湾の糖業貿易に影響を及ぼした。砂糖輸入国の需要減少によつ
 て余剰となっていた砂糖の輸出が、更に困難となったのである。⁵⁶ 加
 えて、この時期は満洲事変とそれにつづく上海事件の発生により、
 増加した軍費支出が日本政府の大きな負担となっていた。さらに、

日中衝突が引き起こした排日の風潮は、中国東北、華北、華中、華
 南における日本の貿易の全面的な萎縮をもたらし、経済大恐慌以来
 の困窮をさらに増大させた。その結果、一九三一—一九三二年にか
 けて日本国内において物価は暴騰し、豊作によつて農作物は暴落
 し、同時に中国を主な市場とする台湾茶の輸出と日本を市場とする
 台湾の米穀移出にも影響を与えた。⁵⁷

小説が始まる六月は、一連の経済危機の衝撃、濱口内閣の財政緊
 縮政策、金輸出解禁に伴い、台湾の経済が日増しに困窮していた時
 期に重なる。作者は市内銀行員の言を通して、台湾金融業もその影
 響を受け、融資需要の増加、借金の回収困難などにより疲弊してい
 く事実に触れている（二三一—二四頁）。小説は「カフェー満洲」の開
 業時期を一九三二年春に設定している。「満洲国」と同時に誕生し
 たこの舞台を借りて、作者は皇姑屯事件、東北易幟、「満洲国」建
 国、満洲国承認問題を反映した小説を書き上げ、台湾での「満洲
 ブーム」を引き起こした。と同時に、普段の台湾人の会話と付き合
 いを通して、東アジアの政治経済情勢の変化がもたらした台湾の社
 会経済問題、そして一家の興亡と個人の喜怒哀楽を描いた。

小説は、この二階建てのカフェーに結婚の悩みで友人に助けを求
 める主人公「李金池」が登場することによって始まる。表町に位置
 するこの建物は、面積は広くないが、上の階にも下の階にも座席が
 設けられ、二階だけでも十二、三のコーヒータブルがあり、当時

としては規模は決して小さくない。蓄音機から音楽が流れ、青のガラス製の花瓶と白の四角い灰皿がテーブルを飾っている。日本髻を結った純日本式の女給と、男とさほど変わらない断髪の洋装女給が「艶姿」を見せ、テーブルの間を歩き来して接客している。その数は二十七、八人。一群の客が「カフェー満洲」のトップ女給、静子という日本人女性と談笑している。

「趙さんも、徐さんも、久しぶりね。どうしていらつしやるの？」

(中略)

「病気で、入院してゐたんだ、俺は、ハハハ……。」

「俺もさー！」

二人とも、大きな声で笑ひながら云つた。

「まあ、ご病氣つて、ほんたう？」

笑談とは知りながら、静子は、真面目くさつて、哀れみを含んだ声で云つた。

「一寸も見舞に來なかつたから、俺は、再び満洲に足を入れぬつもりであるんだよ。」

「満洲へ行つて、ルンペンになつちや……ハ……ハ……。」

友三がしやれを云つたので一同は思はず笑ひ出した。

「ほんたうにね。満洲国へ行つてルンペンになつちや、困る

でせうが、カフェー満洲なら、大丈夫よ。」

「あつちの満洲は、金儲けに行くんでせうが、こつちの満洲は、金使いだぞ。」

(中略)

「あつちの満洲へ金儲けのつもりで、多額の旅費をつかつた揚句、ルンペンになつてごらんさい。それこそ馬鹿を見ちゃうでせう。それよりも、こつちの満洲の方がいいと思ふわ。」

(二一—二二頁)

経済恐慌が続いて不景気なこの時期、「満洲へ出稼ぎに行く」という話は台湾でも盛り上がる話題であつた。

「カフェー満洲」、「明治喫茶店」、「新高喫茶店」それと「二五圓均一」の料理を提供する「高砂ビール屋」は、島都の繁華街にある新興の娯楽場であつた。カフェーはコーヒー、ビール、アイスクリーム、イチゴサイダー、果物の盛り合わせ、軽食、ケーキ、氷アズキ、寿司、デザートなどを提供するが、「明治」あるいは「新高」と比べると、女給がいるカフェー満洲は男性へのサービスを強調する傾向があつた。特に注意すべきは、小説の男性主人公の放浪地の一つとして、「カフェー満洲」は小説の時間の隠喩に見えることである。すなわち「争へぬ運命」という時代遅れの結婚悲劇が生じた時期の台湾は、すでに明治から大正、昭和へと移り、さらに風

雲変化の満洲の時代に入ったことを暗示しているのである。

「父女情深」という一節では、台湾出身の謝介石及び日本出身の駒井徳三が「満洲国」高官の座にめでたく登ったことがメディアで大きく報道されたことに触れている。

三段ぬきに大見出が、

「宮中の貴賓、政府の国賓として」「謝外交総長の」「接待方法決定」と、初、一、二号といふ順に活字が三行に列べられてあつた。更に五号活字が、

「来る〇〇日來朝する満洲国特使謝介石氏の接待方法に就いては宮中の貴賓として待遇し、その後政府の待遇を国賓とするに決定、宮内、外務両省に打合中の所〇日 天皇陛下の御裁可を仰ぎ宮中御接待のスケジュールを左の如く発表した。云々……」と綴つてあつた。

「まあ、ほんとに、素的ね。」

「そうだね。世の中つて解らんものだよ。謝さんが、吾々の仲間では、一番呑気坊で、一番無鉄砲な男だったが、併し、人間つていふ者は、時、運、命の三拍子が揃はないと……。」

「ほんたうだわ。お父さんも謝さんと同じやうに中国へ渡つておれば、今頃、或は、謝さんのやうに何かの総長になつてもかも知れないわ。」

「い、や、さうはいかんよ。たとへ、時と命とは同じでも、運つていふ奴がなければ。儂が仮に中国へ渡つておつても、……さあどうなつているんだらうね。おそらく馬賊にやられて死んでいるだらうね。ハ、ハ……。」

「さうね。全く運かも知れないわ。それ、今の駒井総務なんか、大学を出たとき、どこかの電力会社か、石油会社かの採用試験に合格しなかつたとか、重役の質問が気に食はなかつたとかで満鉄へ入つたんださうです。それが、今日一国の総務となつてるぢやないのホ、ホ……。」(二六三―二六四頁)

謝介石は一九三二年三月九日に満洲国外交部総長に、翌日に駒井徳三が総務長官に任命された。士紳階層の台湾人が満洲国建国後に重用されたことは、島内で大きな反響を呼んだ。社会人になった当初は失意にあつた駒井徳三が抜擢されて、満洲へ才能を生かしながらと日本の青年に呼びかけるようになったことは立身出世の最も代表的な例である。しかし、この家庭における父と娘の対話は、満洲に対する台湾の中上層階級の認識は限られたものであることを示しており、「機会に満ちた新天地」と「馬賊にやられて」は当時の満洲認識における両極を反映している。

満洲国建国初期の人事任命以外に、政界の更迭に伴って登場してくる人物の経歴も、台湾の知識人に多くの感慨をもたらした。「反

抗」という一節において、士林望族の出身である金池学長「玉生」は、連日報道される斎藤内閣のニュースを読み、今の首相がかつては台湾の県政府の役人であったことに鑑み、自分は京都帝国大学という最高学府を卒業したのに前途が暗い、と慨嘆している。

作者は満洲事変に関係する事態の描写を通して、一九三二年を「満洲事変の時代」と記している。日本の元号の「明治」、台湾の象徴「新高」、国際的焦点である「満洲」にちなんで命名されたこれらのしゃれたカフェーは、変化しつつある東アジアの図像を浮き彫りにしている。「カフェー満洲」で幕があげられたこの小説は、娯楽場の名称を用いてこの尋常ではない東アジアの変局を反映する^⑧一方、一九三〇年代に台北は市民消費と公共空間が発展する「カフェー時代」^⑨に入ったことも説明している。この時期、植民統治は安定し、和洋混交の文化が盛んになり、日台の生活習慣も交じり合い、民間企業は旧暦と新暦の元日（日本の元旦）にそれぞれ決算、年賀の行事を行い、人々は場面によって洋服、和服、台湾服を着替えるのに慣れていった。京都帝国大学で法律を学んだ李金池は、ある時雨が降る酷暑の午後に、家族経営の会社に勤める同じ大学の先輩、総督府衛生課の役人、銀行員、商人などと、「カフェー満洲」の一つのテーブルに集まった。

黒い学生服、洋服、白い役人服を着た高学歴の新式の青年たちの集まりは、カフェーを優雅に彩った。彼らの談話と活動から、蓬萊

閣、江山樓におけるフォーマルな宴会、カフェーにおける集まりや談話に、中上層がすっかり慣れていることを窺い知ることができると。また、総督府の役人たちは休日には制服から解放され、淡水のゴルフ場へ行ったり（二六五頁）、圓山野球場で熾烈な野球の試合を見たりした（四四一頁）。また羽衣会館、同聲倶楽部などのダンスホールでは上海、日本、台湾出身の踊子たちがワルツ、フォックストロットを踊ったりしている（三九七頁、三九八頁）。その他、倶楽部、草山のホテル、北投温泉旅館（三五二頁、三八八頁）、大稻埕芸者の現代風寢室の花柳密室（二〇二頁）も男たちが遊びにふける場所である。電報、電話、新聞を通して情報が伝えられ、電力会社、火災保険、記者、代書などの新しい業種や職種が発達し、名刺は紳士、エリートたちの必需品となり、遺産相続、連帯保証、離婚条件などの法律概念も普及し始めていた。

中上層男性の公共空間と生活スタイルが形成されていくと同時に、この都市における女性の活動空間と消費活動も増大した。「結婚に依つて、明い人生を見出さうとしてゐた」（二三九頁）、「結婚生活は、愛と愛の結合で、自他の合一である」（五六頁）、「結婚の第一条件は恋愛だ」（九九頁）、「愛のない結婚は、体裁のいゝ、人身売買だと思ふ」（九九頁）などの考え方が流行り、女性も「西洋の女のやうには望み得ないが、せめて、日本婦人のやうに、少し位ゐるの自由を認めて欲しかった」（三〇頁）と考えるようになった。女

学校でも結婚はしばしば話題となり(六二頁)、デート、ラブレター、自由恋愛、友人関係からの結婚、自由な情欲などが女性たちの熱中する話題となった。洋裁、化粧、読書はインテリ女性の教養と日常生活の重要な一部分となった。上流階級の女学生が内地の修学旅行に参加し(二二二頁)、女性車掌、女性教師、女医などの職業婦人が登場し、台湾の街角にも「モガ」(modern girl)、「モボ」(modern boy)、「不良少年」、「不良少女」が現れた。島都の上流階級の娘たちはまさにモダンであり(二五二頁)、ハイヒール、ソックス、つやつやの素足が流行り、神前結婚、白いウェディングドレス、乗用車パレードは令嬢たちの結婚に不可欠なアイテムとなった。太平町にある台湾唯一の七階建てビルである菊元百貨店(四一五頁)、洋服、帽子、洋傘、ハンドバッグを扱う村井商行と盛進商行、ホワイトカラーの月給の半分以上もする舶来品の香水を扱う大倉百貨店、『主婦の友』を販売する新高堂書店及びカフェー、映画館、動物園、公園などはすべて、若い女性がバスに乗ればすぐに行ってぶらつける場所であった(二五二頁、二五九頁)。

台北のもっとも広い三つの道路には市営バス、タクシー、トラックが疾走し、総督官邸前や都心周辺は常に何百台もの車が行き来している(二二二頁)。路面電車と道路が交錯し、新式の散水車が繰り返し熱い道路に水をまいている(二四八頁)。「新館」(「新世界館」の略称)、「第二世界館」、「芳乃館」などの映画館には、日本の現代

劇、任侠物、時代劇がすべてそろっていた(二六七頁)。台北銀座と呼ばれる栄町、新銀座と呼ばれる京町などのショーウィンドーには鮮やかでまばゆいばかりの高級商品が飾られ、手頃な西門の夜市は人波でごった返していた。国際基準に合わせて商店文化にも新しいスタイルが定着し、均一価格、年末セール、食事の前に清算する営業スタイルも現れ、「いらっしやいませ」「毎度ありがとうございます」など新式の挨拶も絶え間なく聞こえてくるようになった。中上層家庭の蓄音機からは舶来のジャズが流れ(七九―八〇頁)、ラジオは各種の情報や日本の経済ニュースを放送していた(二五一頁)。「台湾日日新報」や『台湾新民報』を通して、国際的な重要情報から台北の冠婚葬祭までが、すぐに人々のお茶の間の話題となるのであった。

市営バスは故障が頻発し、パンクやガス欠のために途中で止まったりすし詰めになっていた。そんな中で乗客同士が乗り換えの際に出会い、更に交際を深めていく物語も増えてきた。夜九時半の終バスは市民の移動と夜間生活の延長に大きな便利を提供し、女性車掌は愛想がよく、「乗客第一」のサービスは、言い争いが絶えない鉄道の駅とはまったく別の世界であった(一三七―一三八頁)。バスを降りる乗客たちの中に、白い麻の背広を着て、黒い蝶ネクタイをつけ、外国製のやや上等のパナマ帽を被り、ベッコウの眼鏡をかけた紳士がいるのも珍しいことではなかった(二二二頁)。真っ白なスー

ツに黒いネクタイ、運転免許を持ち、相変わらず危険だと思われる乗用車を運転する紳士たち（一九〇頁）も、偶に見かけられる島都の美であった。

一方、内地あるいは台湾の大学を出た卒業生が増加し、「知的労働」によって生きていく「エリート層」が形成されたが、内地でも台湾でも供給が必要を上回り、法学士は「まるで石塊のやうに何処でもころがつてるやうなもん」で（七二頁）、就職は難しく、給料も低かった⁽⁶³⁾。公学校上級の女学校の卒業生も、同様に「石塊のやうに多い」状態であった。十分かつ適切な職業が提供されなかったこれらの新しい女性の多くは、都市のサービス業の中の低層の職業に甘んじるしかなかった。したがって、「カフエー満洲」には女学校出身の女給が十六人もいたという（二九九頁）。台北市役所、御成町市場、米国領事館、馬偕医院、圓山公園、明治橋、台湾神社が、市内から士林、北投へ向かう方向、島都の南北を縦貫する最も重要な勅使街道の両側にあった。新聞には辞書を調べても見つからない外来語の新語が続出し、優越感を持つ都市民も「大都市の台北に住んでゐたんだから、容易に教へてもらへたが」（七八頁）、しかし「大学を出た社員にきいて見たところ、何時も首をかたむけてゐてすぐに返答ができないんですからね」（七五頁）と嘆いている。その他、いつまでたっても変わらない冠婚葬祭の習慣、人力車に乗って駆け回る芸者（一九七頁）、芸者の歌を余興に入れる俗悪な婚礼

（三三二頁）、農業社会にはめつたになかった交通事故、大稻埕の女性が湯水のように金を使う流行（二一九頁）、一夜の情事、不倫、離婚、心中と不幸者の「自殺聖地」である明治橋、宮前町の精神病院「養浩堂」（三七〇頁）、そして破れかぶれに金持ちの金を脅し取る無頼の徒（二七六―二七七頁）などの一種の社会悪もまた、当時の島都風景の一部であった。

祖母の八十一歳の誕生日を祝うため、主人公の金池は大学三年の夏休みに父親李興旺からの電報で家に呼び戻され、父の命令のままに婚約した。母親の誕生日祝いに千円を惜しげもなく注ぎこむ李興旺は、台湾有数の巨商であり、先祖は士林一番の金持ちであった。

李氏の邸宅は士林公会堂の隣に位置し、五百坪もある広い庭園に入ると、目の前に最初に現れるのは大きな丸い噴水池であった（一四四頁）。理想主義的な性格を持つ金池は、島都文化が激しく変化しているにもかかわらず、中上流家庭の結婚が相変わらず家父長によって決められていた時期⁽⁶⁴⁾に、二人の運命的な女性と出会うことになる。彼と関わった二人のヒロインは、いずれも萬華の名家の出身で、一人は公職にある士紳陳太山の長女「陳鳳鶯」であり、一人は太平茶行を経営する巨商楊文聡の娘「楊秀惠」であった。鳳鶯は「萬華一の美人」と称され、台北第三高等女学校の出身で、毎日家で読書や裁縫をし、新聞、『国王』、『富士』、『主婦之友』などの大衆雑誌や長篇小説と映画を通して外部社会と接する現代の女性であ

り、秀惠は公学校を卒業した後、高等女学校に一年しか通わなかった断髪洋装の現代女性であり、上海のモダン女学生のように、女中に伴われて繁華街でショッピングを楽しんだりしていた。

「カフェー満洲」から家に帰ったその夜、金池は「恋愛至上論／恋愛結婚論」を唱えて媒酌人と父親に反抗し、陳家との婚約を断つた。翌日、彼は城隍祭の十万人の人ごみの中で、ある女性の足を踏み、その女性に一目惚れをしてしまう。台湾ではめつたに見かけないそのファッショナブルな「台北の女性」に深く魅了され、初恋に落ちたのである。実は婚約を断った女性とは、一面識があり、その優雅さと教養の高さが深く金池の印象に残っていた鳳鶯であった。しかし、彼はそのことに気がつかず、一目惚れした秀惠と、台湾上流社会の習慣に沿って、「先に婚約、次にデート」という形でデートを始めた。金池は相手の浅薄、そして二人の価値観の齟齬に直ぐに気付くが、双方の家庭の体面を考慮し、やむを得ず苦々しい気持ちで婚約を果たした。婚礼のニュースは直ちに『台湾新民報』に掲載された。

一九三二年九月一日の同じ日、同じレストランで、二つの豪華な婚礼パレードが行われた。「中上層家庭の女性の結婚宿命論」を持つ鳳鶯も、総督府役人の紹介を通して、一度も会ったことのない花婿と神前結婚式を挙げ、大稻埕の米商郭西湖の家に嫁いだのである。不幸であったのは、結婚の一年後、李興旺夫婦と郭西湖父子の

乗った車が、悪天候のなか草山（現在の陽明山）の山道で衝突し、幽谷に墜落してしまったことである。鳳鶯の夫啓宗は一命をとりとめたが重傷で、他は全員死亡してしまった。これをきっかけに双方の家運は傾き、二組の若い夫婦の間にも軋轢が増していく。金池は連帯保証人であった亡父の巨額の賠償金を支払うため、家財の大部分を失った。彼は窮屈な現状から自分の未来を見つめ直し、先輩の世話で新聞社の記者になり、普通の中上層の給料を得たが、秀惠との亀裂は広がっていく。ある日の深夜、贅沢で不品行な妻に失望した金池は、毎日何度も往復する勅使街道を辿り、明治橋で自殺を図ろうとするが、そのとき偶然にも、同じく間違った結婚に苛まれ、橋の手摺を登って川に飛び込もうとする鳳鶯を救うことになった。⁽⁶⁵⁾

自由恋愛と運命の糸が絡み合う紆余曲折を経て、金池がか弱い鳳鶯の苦痛を聞いた瞬間、彼はようやくやく婚約に翻弄された事実を知る。名家出身の留学生青年が結婚をして子供を持ち、家財を失ってサラリーマンになり、最後に妻子と別れた。このような三年間を経た後、天意は必ずとあると考えていた金池は、自分が絶えず否定してきた台湾社会の遅れた建前の裏側に、また、新と旧、日本と台湾の間に、それ相應の倫理と秩序があったことを理解する。過去の自分は「実社会を遠く離れていた」ことを自覚し、鳳鶯を励ましながら、社会に融けこみたいという生への欲求が再び生まれ、自身の価値観を熟成させていった。

このように、『争へぬ運命』は結婚を切り口として、大学を出たばかりの若者が家父長制と個人主義との葛藤の中で社会化していく過程を描いている。島都の万象の描写以外に、地元士紳が没落していく社会現象をもとらえたものとなっている。大稻埕の米商郭家と土地に投資し財産を増殖した士林李家は、ともに跡継ぎの下手な経営によって傾いていく。大稻埕の茶商楊家は堅実で手際がよい長男が受け継いだため繁昌を保った。数多くの役職を務める萬華の陳家は現代の家風と伝統的な習慣をうまく取り入れているが、三人の娘以外に跡継ぎがない。士紳の家庭は婚姻の結びつきを通じて家業を固めるが、経済不況、複雑な新式商法、悪化する社会気風の中にあつて、第二世代は出世できず、あるいは留学を経て帰国しても島内の風習に耐えられず、家業を相続できなくなっていた。本土のエリートでさえも出世のチャンスに恵まれなかった当時、時代の試練に耐えられない士紳子弟は普通のサラリーマンになるほかなかった。「満洲事変の時代」に設定されたこの物語は、豪華絢爛な島都風景という外見とは裏腹に、暗い旋律を隠している。主人公の階級は下落し、「金童玉女」(美男美女カップル) 式の結婚も悲劇に終わった。これは恰も厳しい現実に耐え忍び、希望を求める次の時代を予告するかのようである。

四、「時事進行式」の叙述と潜在的輿論

——本土の新聞小説と『台湾新民報』社説

呉三連がかつて指摘したように、『争へぬ運命』の執筆はある談話が発端となっている。⁽⁶⁶⁾ 林焯焜は当初純文学としてこの小説を書くつもりはなく、学生時代から新聞小説を読みあさってきた「自分の今までの常識」で、「台湾を題材に、日本語による小説創作」を試みたのである。⁽⁶⁷⁾ 長い間、日本の新聞小説に影響されてきた植民地の作家は、この外来の文学形式を台湾化するに当たってどのような視野と認識を持っていたのであろうか。小説の叙述はどのような特徴を持ち、そこにどのような社会観念を潜ませているのか。いずれも検討に値する問題である。前節において、島都の風俗を再現した場面のいくつかを紹介したが、本節ではその「市民的」大衆小説の意図、独特の「時事進行式」の叙述方法を考察することにより、島都の描写と満洲事変との関わり及び通俗的恋愛を超えた奥深い内容について検討する。

小説は、台湾人が住む主な台北市市街の産業の伝統と士紳の特徴に触れ、日本経済が低迷する中であつて、内地を第一にして植民地の利益を犠牲にする政策、台湾本土の資産階級が日増しに衰退していく苦境を描写している。筆者は筆の赴くところ、複雑な運命と縁のほか、目まぐるしく変化する国際情勢、満洲事変がもたらした

戦雲、緊張を増す日米関係とそれに影響された台湾の金融、貿易、農業、市民生活などのすべてが間接的に、都市に住むこの中上層の青年男女の運命を左右していることを示している。島都の流行を描き、社会現象にも触れ、フィクションに富む物語の中に社会問題に関する著者の議論を組み入れ、「教えるよりも楽しむ」という叙述の形式は、ロマンチズムと風俗史を兼ねる日本の大衆小説の特徴と類似している。しかし、新世代の恋愛、「考現学」的な都市風俗、新旧世代の士紳群像、『台湾新民報』の記事主張と符合させ、市民性と時事感覚の創出にウエイトを置いたことは林焯焜の独創であり、それこそが日本の新聞小説を台湾化する試みでもあった。

一九二〇年代には、台湾人による新聞は台湾では発行が制限されていたため、『台湾新民報』はまず東京で創刊され、少なからざる困難を乗り越えて、一九二七年末から台湾で発行するようになり、一九三二年四月には日刊の発行許可を得た。⁶⁸同年四月一日に掲載された社説「衆望の日刊が誕生する」には、「長年にわたる台湾人本位の日刊新聞の問題がこれで明白に解決した。わが島の言論界にとって、画期的な新时期となり、台湾の前途のために喜びを申し上げたい」、「本新聞は啓蒙時代に奮闘し、努力を尽くしたが、今は陣営を一新し、日刊という最高のレベルに堂々と邁進し、各方面において画期的な飛躍を演じていく」と興奮した心情が記されている。『台湾新民報』は毎日三万部発行され、台湾のメディアとして「時

代を画する」発展を実現し、本土の日本語新聞にも載る小説の登場を可能にした。

『争へぬ運命』が描写した豊かな社会的現実を見ると、作者の社会に対する観察力は鋭く、新聞小説と単行本小説との根本的差異をふまえ、時代の発展とともに読者大衆の実感と読書の趣味に訴えるべく、とりわけ特定の属性を持つ台湾読者のニーズをいかに満たすかを、作家林焯焜がよくわきまえていたことが分かる。台湾人本位の新聞において新聞小説ブームを切り開くことは、決して作者個人の関心にはとどまらず、様々な経営戦略を試みようとする台湾新民報社の関心でもあった。言い換えれば、台湾人新聞の飛躍的な発展が、さらに東京から台北に転勤して編集総務と論説委員を担当し、林焯焜と親しく付き合っていた呉三連が、台湾人的な特色を持つ小説を構想する段階で、林焯焜に一定の影響を与えた可能性がある。

『争へぬ運命』は、『台湾新民報』が日刊として発行され始めてから最初に掲載された新聞小説である。連載が終わると新聞社は単行本を出版し、著名な画家塩月桃甫が表紙と装丁を担当した。単行本が上梓された時、呉三連は謝辞において、「この小説の文章、筋そこに現はれた思想等に対し相当議論もある」と述べている。林焯焜も連載中にわざと事実と事実と反するような場面を交え、読者の注目を引こうとした事実と触れた。林焯焜は次のように書いている。「小生は、作者としてではなく、一台湾人として全台湾の同胞に云ひた

いことがある。それは何かと申しますと、もうすこし、台湾人は全
てのことに関心を持って欲しいということである。その訳は、約百
七十回もかきつけ、七箇月間も費したこの台湾で始めての新聞連
載長編小説に対して、批判的投書がなかったことである。実に残念
である。小生はわざと、城隍爺祭や芸者女郎の提灯をもった。台湾
人の無自覚を罵倒した。しかしこれに憤慨し、小生の不見識を詰問
するものがなかった。この調子では、台湾の文化は永久に発達する
見込がないと云つてい、。お願です。今後、誰の作が載るか分らな
いが、もう少し作者を励まし、刺戟を与へて欲しいものである。小
説のみでなくて、全ての事柄についても関心を持って欲しい。⁷¹こ
こで「提灯をもった」というのは、この年の城隍爺祭を例にすれ
ば、『争へぬ運命』の「鞋印」という一節で祭り当日のインテリた
ちの対話を借りて、祭典の贅沢は経済の発展に寄与するとの議論を
展開したことである。しかし『台湾新民報』は一貫して反迷信、陋
習批判の立場を堅持し、当日の社説においても「例年の旧暦五月十
三日の大稻埕の「迎城隍」は賑やかで、田舎から多数の男女が集
まってくる。少し貧しい者は物品を抵当に入れ、接待用に資する。
更に抵当に入れる物がない貧しい者は、戸締りをして親戚友人の来
訪を避けるしかないようである」と批判している。⁷²

林焯焜は一方で「新民報の数万の読者諸賢」に感謝を表し、『争
へぬ運命』は「台湾における最初の新聞連載長編小説」であると自

認し、⁷³後に掲載される作品に対する読者の関心を呼びかけた。つま
り、作家は台湾新聞小説と文学史におけるこの小説の意義を十分に
認識していた。故に『争へぬ運命』を特殊な時期に書いた創作の動
機は、決してただの「笑談」にとどまるものではない。日本語に通
じた階層に優れた小説を提供することは、台湾本土の日本語新聞小
説が成立するための要件である。大衆に受け入れられやすかったの
は、市民向けの「大衆小説」、特に物語の時間、空間、人物、事件
において実感を持つことができる作品であった。一九三〇年代初頭
において日本語に通じていた階層は、公学校の高学年、中学校、高
等女学校、高等学校、専門学校、大学、大学以上、そして自学と夜
間学校を通して日本語読解能力を身につけた人たちであった。物語
の内容を見ると分かるが、『争へぬ運命』の舞台、題材、人物、ス
トーリー、プロットなどの選択と設定は、すべて潜在する読者と、
その読者の期待に応えようとする作家の細心の気配りと確信のあら
われである。例えば「父女情深」という一節では、小説や新聞小説
に関する陳太山と鳳鶯の対話を通して、「小説を読む」ことで女性
は各方面での生活常識を増やし、時事の動向を知ることができる
読者に説いている。

林焯焜の大衆小説の特徴には、以下のような優れた点がある。第
一に、物語の舞台を全台湾の読者の期待がもつとも高い場所――
真っ先に新しい気風を導入し、近代化が速やかで、目まぐるしく変

転するモダン都市台北——に設定したこと。第二に、鳥都の中上階層の日常生活、この階層の消費需要を満たすために発展したサービスマスとその従業者を通して、市街風景を描写し、市民生活と流行の話題をキャッチし、鳥都の風情を具象化し、先端的な場所及び鳥都空間のリアルさを創出したこと。第三に、上流家庭の富裕な暮らしとロマンチックな恋愛を題材にとりあげて、読者の驚嘆と幻想を呼んだこと。第四に、潜在的な読者のために、官吏、士紳、ホワイトカラー、商人、記者、大学生、女学生といった多彩な人物を設定し、都市における話題の焦点であり、都市の情報をいち速く伝達するサービスマスの女性——芸者、女給、ダンサー等——にまで触れていること。以上の設定により、『争へぬ運命』は男女を問わず社会の中堅あるいは青年読者の興味を呼び、鳥都の都市生活をともに享受する市民読者の読書と雑談を市民の共通の話題作として再生産した。当時、新興都市台北の市街を散策する読者たちが、自分たちの鳥都がつぶさに描かれた初めての小説を手に取り、その中に自分の姿を重ねて、愉快な微笑みを浮かべたことは想像に難くない。

想定される読者の興味と実感を呼び起こした他に、この小説は、帝国の経済圏、文化圏、消費圏というネットワークにおける重要都市に駆け登っていった台北の特質を見事に反映している。例えば、「縁破前兆」には、陳太山が、日系新聞において外来語が氾濫し、読解困難になっている状況を批判し、「……君、全日本国内、及び

満洲、大連、華南、南洋方面に渡つて、儂のやうな考を持つてゐる人が、かりに、十万人あるとする。確にその位はあると思ふが。さうなると、その新聞社は、毎月十万円だけ、利益が少なくなりやしないかと思ふよ」（七九頁）と言う。この発言から、満洲事変後の台湾中上層が、すでに台、満、華南、南洋等を言語、消費、情報をつかち合う一つの経済圏と見なしていたことが分かる。もう一つ例を挙げれば、作者は「新館」で上映された映画『七つの海』（二九頁）と『海燕』（二六八頁）を取り上げている。『七つの海』は犯罪実録小説を書いて女性読者の歓迎を受けた牧逸馬の連載小説を映画化した作品であり、『海燕』は小島政二郎の作品で、同じく『朝日新聞』に連載され、人気を得た大衆小説である。二つの作品はそれぞれ一九三二年三月三十一日、一〇月二二日に初めて台湾で上映された。『台湾日日新報』文芸欄は、上映当日にあらすじ、キャスト、写真を載せて宣伝した。⁷⁴ 帝国内の主要都市で上映された日本の無声映画は、台湾の日本人と少数の台湾中上層に対して、ほぼ同じ時期に内地の最先端の視覚的娯楽を提供したのである。三つ目に、全日本に漲っていた野球ブームに影響され、台湾でも野球試合が開始されたことも、また注目される。一九三三年一月、日本から遠征してきた「法政大学チーム」と台北電信局「CBチーム」の圓山野球場における決戦は、台北放送局により生中継され、また新聞でも報道された。試合は法政大学が二勝一敗で勝利した。⁷⁵ 『争へぬ

運命』の中で金池、友三、カフエー満洲の女給静子の三人が観戦に出かけた実業団野球試合は、地元台湾の「CBチーム」が一敗した後一勝するというシーソーゲームで、観客を狂乱させた試合である（四五九頁）。

商業の場で活躍する林煇焜は、豊かな社会経験と時事に対する感覚の鋭さを發揮し、物語の中でも時事問題にしばしば触れ、『台湾新民報』の社説と呼応させている。この手法は「時事進行式」の叙述モデルとなっている。これは「この小説の文章、筋そこに現はれた思想等に対し相当議論もあるう」という呉三連の発言を裏付けている。議論に値する議題を小説の前面に出すことを意図しており、更に言えば、これは作家が「台湾を題材に、日本語で小説を書く」ことを実践するための手段でもあった。林煇焜の「時事進行式」の叙述方式は、すなわち登場人物の時事に対する議論を通して、恋愛や感情、青年の社会化というテーマからより広いテーマへと拡大していき、国際情勢や台湾の社会議論に言及し、それを『台湾新民報』の時論に符合させ、を通して満洲事変がもたらした東アジア社会の変化と同時代の台湾植民地社会の問題点を描くものであった。その中でも重要な問題であった知識青年の進路、台湾米穀の移出問題、農村救済などについて、実例を挙げて説明していく。

まず、知識青年の進路に関していえば、小説の第一、二、三、五回において、台湾知識人の就職難について触れている。この問題に

ついでには、小説が掲載される一カ月前の『台湾新民報』の社説「須考慮臺灣青年的進路」（「台湾青年の進路を考慮せよ」）が、状況を厳しく批判していた。この社説は、田健次郎総督以外のこれまでの総督は、「すべて内地人本位であり、台湾青年の進路を顧みない」ので、「台湾人青年が国家と社会に貢献するため、東都に留学し、莫大な金銭を投入しても、台湾に帰ると高級な遊民になってしまう（検閲によりこの後三行ほど削除されている）。台湾において才能を生かす場所がないため、海外に進出しようとするのも無理がない」と批判したのである。

次に、台湾米穀の移出制限と米穀統制に関しては、「父女情深」の回で、公職にある土紳陳太山が総督府の特産課日本人課長に窮状を訴える場面が描かれている。職務報告のために東京に戻った課長は中央政府に、台湾米穀移出制限が台湾の小地主にひどい影響を及ぼしていることを訴えた（二六八頁）。一九三二年五月に実施された台湾米の日本移出制限は台湾の経済と農民の利益に直接打撃を与え、三〇年代前半期における台湾植民地政策の最大の争点となった。この問題については六月一三日に初めて『台湾新民報』が報道し、社説は「前月、農林省は内地農村の疲弊を救うため、植民地米の移出制限を計画した。この計画が伝わると台湾と朝鮮の住民はパニックを起こし、自身の死活に関わる問題であると抗議した。台湾と朝鮮の各当局も同感の意を示して反対したため、農林省はこの案が実

行不可能であると判断し、移入制限から移入統制へと改めた」と伝えている。⁷⁷ その後の関係社説は年間十数本に及び、一九三五年まで続いた。議論が数年にわたったことは、問題の深刻さを物語っている。⁷⁸

『争へぬ運命』が書かれた一九三二年の關係社説を取り出してみると、政策の分析に重点が置かれており、内地農村を救済するため植民地を犠牲にする政府の行為、移出制限と米価調節などの措置は台湾農村の疲弊を深刻化させている、と批判している。⁷⁹ 同時に、反対運動を鼓吹し、「米穀経済を生命線」とする台湾は、外に向けては同じ状況下にある朝鮮と連合戦線を結び、共同して植民地に対する農林省の差別措置に反対し、内に向けては反対宣言を発表する他、組織的な運動を企画し、「台湾各界の民衆を糾合し、内外の輿論を喚起し、要人を訪問し、代表を上京派遣させたりするなどの手段を用いて所期の目的を達成しなければならぬ」と主張した。また、七月一七日には「台北米穀商組合」が全島の各街庄長を招いて全島大会を開催し、反対宣言を行った。同年夏には全台湾の「台湾米移入制限反対同盟会」の上京請願や対策研究会の開催についても、多数報道されている。⁸⁰

『争へぬ運命』は、台湾米移出と統制問題については軽く触れているだけであるが、登場人物の議論を通して、一連の政策が台湾社会の高度な関心を呼び、島内の士紳が奔走し、総督府の役人と連絡

を取りながら内地と台湾の間を斡旋する様子を描いている。この台湾米移出統制という便宜策は、実は二〇年代後期日本の経済危機の際の応急措置の一つであり、台湾の米農と茶農の困窮、茶商の苦境、農村の疲弊、経済の萎縮、物価の高騰、農村の救済などの問題と深く関わっていた。小説の第一回「西北雨」には、経済不況で銀行と米商が困窮している様子が描かれ、「赴宴」という回では台北最大のレストラン「江山楼」に閑古鳥が鳴く状況が描かれ、登場人物に「何処もおなじ秋の夕ぐれさ。何処でも、悲鳴をあげてるんですよ」と嘆かせている。また、「宿命」においては、数百名の「検茶女工」を抱える「太平茶行」の若い主人楊萬居と金池の対話を通して、「今の茶況で、父は大分心を痛めてるたんですよ」、「茶農あたりでは、随分悲惨だといふぢやないですか」という状況が書かれている。

「さうですね。今の茶況は、ずいぶん悪いらしいですね。殊に、茶農あたりでは、随分悲惨だといふぢやないですか。」（金池―筆者注）

「全く、お話になりません。何しろ、価格は以前の、三分の一しかないし、収穫は以前の二分の一しかありませんので、到底、吾々の想像の及ばぬ苦境にあつてゐるのです。」（楊萬居―筆者注）

「さうですね。内地では、農村救済つて、やかましく云つて
りますが、台湾の農村も、少々頭に入れて貰ひたいね、此際
……」

(中略)

「ですから、私達は数代にわたつてこの商売をやつて来まし
たが、昨今年のやうに苦しい目にあつたことはありません。労
多くして功少いといふ形です。」(一八六一―一八七頁)

台湾米の日本移出の議論に続いて、農村の疲弊と農村の救済も
『台湾新民報』の社説が一九三二年にもっとも注目したテーマであ
る。⁸³ 六月一〇日の社説では、台湾農会は官庁の付属機関であるた
め、農民の利益を主とする反対組織を別に作つて、農村救済の組織
的な運動に取り組む必要がある、と主張した。⁸⁴ 六月二三日の社説で
は、まず台湾北部の茶農の惨状を述べ、「台湾北部の茶農は世界経
済恐慌の影響を受け、極端な安値で採算が取れない。中南部の米は
先日の大雨で減収になりそうである。台南州の特産である薩摩芋は
長雨で腐ってしまった。過去を顧みずとも、現在悲劇が演じられつ
つあり、食べることができず、子を売つて飢えと納税にあてる例は
数多い。台湾農村の悲劇は、内地よりもひどい状態になっている
(後略)⁸⁵」と悲惨な現状を紹介している。続いて、日本の農村の惨状
について内地新聞は多く報道し、議会も救済を声高に唱えている

が、台湾にはこのような輿論がなく、台湾の惨状については全く注
目されていない。更には総督府の役人は「農村救済予算会議」にお
いて、台湾農村を救済する必要はないと発言したと批判した。⁸⁶「内
地延長」、「共存共栄」の精神に背くこの政策に対しては、「われわ
れは植民地の農民大衆のために奮起し、生活の権利を擁護し、農村
救済は内地に止まらず、台湾に対しても同様な救済策で救済を行う
べきである」と主張した。

前述したように、『争へぬ運命』は一九三二年六月中に書き始め
られ、ストーリーは経済危機が世界を席卷し、満洲事変、上海事件
が日本経済の不況をさらに助長した時期に設定されている。不景気
の時代にあつては、島都の繁栄は特定階層が享受しているに過ぎな
い。作者は時事描のさりげない筆致で社会内部の問題を指摘し、
同時に当時の台湾植民地社会においてももっとも影響が大きく論争の
焦点になった問題も導入している。満洲国の精神スローガンの一つ
である「共存共栄」も、またたく間に植民地政策の批判用語に流用
された。作者はこのように輿論が盛り上がった時事問題について詳
しい描写をしていないが、『台湾新民報』論説委員呉三連の社説
が、影のようにストーリーの中に散りばめられている。軽く言及さ
れるにすぎない社会議論が、婚約の奇談と燈紅の享楽の間に挟ま
れ、情愛の物語、島都の記述とは異なる暗いメロデーを奏でてい
る。

『台湾新民報』の読者は、この新聞小説を読んだだけではなく、当然他の紙面に載せられた社説あるいは社会記事も読んだはずである。小説は見えつ隠れつ社説や社会記事と呼応し、相互に「間テクスト」(intertext) 効果を果たした。はかない個人の運命以外に、ひっきりなしに変化する植民地社会の矛盾と、満洲事変という時代背景の要素もその中に働いている。新聞の社説と社会記事は情報と背景的な知識を補充し、小説『争へぬ運命』で深く論じられることなかった社会問題について、読者に連想、理解できる共通基盤を提供した。発表の場である「台湾人新聞」と、小説の内容である「島都記述」は、互いに補完し、想像し合う脈絡になる。つまり、小説に言及された社会時事が、掲載された新聞の批判的な言論の役割を想起させてくれる。『争へぬ運命』の「綿の中に針を隠す」ような「潜在輿論」の効用は、満洲問題において、もっとも力を発揮した。次に、「事変の無意識」と「満洲輿論の間テクスト性」という二つの角度から検討していく。

まず、小説を書いた当時の作者は「事変に対して無意識」であったという現象について検討する。田中内閣は皇姑屯事件及び東北易幟問題の処理が不適切であったため、下野した。濱口内閣の「金輸出禁止の解除」、「台湾米穀移出制限及び米穀統制」は植民地の特産品の移出に致命的な打撃を与えた。齊藤内閣は満洲国の独立を承認し、日満議定書を締結、国際連盟を脱退するなどの外交上の問題を

実現した。小説は、田中義一(一九二七・四・二〇—一九二九・七・一)、濱口雄幸(一九二九・七・二—一九三一・四・一四)、齊藤実(一九三三・五・二六—一九三四・七・八)内閣の更迭を追跡することを通して、満洲問題を提示し、重大時事を描き、「満洲事変の時代」という雰囲気醸し出している⁸⁸⁾。

しかしながら、時事性を重視しているはずの小説であるが、ある時系列に対して大きな間違いを犯している。物語の始まりは一九三二年六月に設定されており、時系列的には主人公の三年間の人生起伏が述べられてゆくが、終わりの時期は一九三三年春になっていく。すなわち、一九三五年春に終わるはずの小説が、作家の勘違いから一九三三年の春で止まってしまったのである。実際、物語の間は前へ進むことが出来ていない。一九三三年の春は小説の執筆、連載が完結する実際の時間である。換言するならば、実際の執筆時間より未来に起こることを書く不合理を避けるためには、物語の開始時間は二年前へと遡り、一九三〇年六月に設定される必要がある。この小説の展開を見れば、作者は小説の第一回でストーリーの開始時間を濱口内閣の金輸出解禁による台湾金融界の混乱、すなわち経済を学んで初めて社会人になった作者にとって印象深かった事件の起こった時に設定したかったようである。これを小説の時間的起点にするのならば、前記のミスも起こらなかつたはずだが、結局作家は一九三二年という時間を選んだ。このミスから分かるのは、

満洲国の成立、謝介石の外交部総長への任命、リットン報告書、国際連盟調査団、満洲国承認問題などの一連の問題が作家の注意を引き付け、その創作に一定の影響を及ぼしたということである。

筆者の考えるところでは、満洲国建国がもたらした衝撃がそれほど大きなものでなかったならば、それに影響されてもとの構想を変更することはなかったであろう。しかし新聞小説のスタイルを取り、満洲事変を「前景」ではなく「背景」にして、新人作家として無意識的に時間、事件、概念を倒錯する小さなミスを犯してしまった。作家林煇焜がどれほど「満洲事変」、「満洲国建国」、「国際連盟処置」などの時事に衝撃を受けたかを窺わせてくれる。満洲事変を島都の記述と結びつける実験を行った新聞小説に時間的錯誤が見えるところに、満洲事変が台湾人の社会意識の中にどれほど浸透していたかがよく証されている。

次に、小説の中の満洲という素材と、台湾人新聞の満洲輿論との間テクスト性を論じてみたい。満洲事変発生当初、『台湾新民報』は「満洲事変」のことを主に「九一八事変」と称していたが、後に次第に「満洲事変」という言葉に転換していった。「満洲国」成立の前、この新聞は中国の民生面において日本商品排斥や各地の抗日活動といった「排日」、「抗日」情報を頻繁に載せていた。それ以外にも、主に以下の問題に注目していた。事変が日本の孤立を招き、日本の輸出経済に打撃を与えたこと、事変の進行に関する国際連盟

の調査と関係意見の発表、「満洲国」成立後に日本側が持ち出した「王道楽土」、「五族協和」という概念が内地の「満蒙熱」を引き起こし、多くの日本青年が満洲に駆け込んだ現象などである。『台湾新民報』が一九三二年四月に日刊の発刊許可を得た時に掲載された祝辞の多くは、中国の情報を多数掲載し、もっと公正な中国情報がほしい、との希望を述べている。そして、一九三二年九月の「満洲国独立一周年記念日」後の社説を比較すれば、『台湾日日新報』における満洲言論との差異は一目瞭然である。

去年九月十八日の夜半に、満鉄線路で日中の軍隊の衝突が勃発して以降、わずか一年のうちに、満洲、上海の二大事変が起り、満洲国独立の情勢に至った。これは長年の日中両国間の情勢による必然的な結果であるが、具体的には描速にことを運んだ形跡があり、多少不自然な形になっている。しかし、形はどうであれ、外の人がどう認識するにせよ、日本が正式に満洲国の独立を承認する時期はここ三四日以内に迫っている。(中略)中国方面を見てみると、満洲独立の問題に対し、極めて沈痛かつ憤慨したが、今日の情勢に限って言えば、仕方がないというべきであろう。このやむをえない状態を抜け出せない時代に、日中の対立は目の前を過ぎさった幻影の如くである。⁽⁸⁹⁾

『争へぬ運命』という物語の時間と現実の時間は極めて近く、一九三二年七月以降、両者は完全に重なっている。物語の中の満洲描写は満洲国建国後の情勢変化に直接重ねられており、作中人物もリットン報告書、国際連盟理事会の満洲国処置に関する『台湾新民報』の社説を読んでいるかに見える。例えば「父女情深」という回は新聞に頻繁に載せられた国際連盟調査団の状況及び一部の煽動的な言葉が、戦雲が近づいているという感を民衆に抱かせたことを示している。

「ねえ、お父さん、日本と米国は戦争するか知ら？」

「解らんね。」

「リットン報告書ぐらゐで戦争が始まれば、大分つまらないわね。今日の新聞ぢや、日本も大分覚悟してゐるつて書いてるが……。」(二六六頁)

小説中ではわずかに二行であるが、『台湾新民報』ではリットンの報告書をすべて中国語に訳し、日本に対する国際連盟の疑念も詳しく紹介したため、その影響力は決して小さくなかった。

満洲に対する認識について、多くの中国人移民が満洲の所有を決定するのであれば、過去の二十五年間は中国領土であったこと

とは各国に公認されている。しかし、この間、この地域における日本の特殊権益が次第に拡大し、中国の国権回復と対立している。故に両国の衝突は当然の帰結であり、遂に去年九月十八日の夜の日本軍による行動に至った。それでもこれは正当な自衛手段だとは認められず、錦州爆撃に至っては非正当云々と言われた。⁹⁰⁾

国際連盟理事会が満洲国の処置問題をどのように決議するかは、日本経済と台湾経済の景気に多大な影響を及ぼすことから、小説の中でも企業家と知識階層が会った時には必ず議論される話題であった。「萬居は、金池と二人で、ゼネバにおける聯盟の空気や、満洲の将来や、日本の景気等々を喋りつゞけてゐた」(四一四頁)と書かれているが、この会議が一九三二年一月に開催された時、『台湾新民報』の社説も、日本代表がパリを經由してジュネーブに到着し、満洲国が不承認となった時、日本が国際連盟脱退を宣言したことに⁹¹⁾ついて、紹介・分析している。

総じて言えば、『台湾日日新報』が満洲国、満洲事変記念日を喧伝した際、台湾本土の新聞『台湾新民報』とそこに連載された最初の新聞小説は社説と小説の間テクスト性を利用し、彼らの目に映った異なる光景と意味を持つ「満洲事変」を描いた。クローズアップの程度と使った紙面の多寡で区分してみるならば、『争へぬ運命』

は世俗的な男女の恋愛と結婚を重点および表層としてまぶしい鳥都の風情を描いたものであるが、これを掘り下げると、根底には満洲問題及びこれに関連する台湾社会、経済の苦境と植民政策の議論があった。国際的に注目され、台湾メディアが関心を寄せた満洲問題はさりげない筆致で触れられているにすぎないが、しかし、その後には隠されたように見える満洲言説こそが、この作品の批判言説が成り立つ核心なのである。

結 論

満洲国は独立国家を称したが、国際連盟からは承認されなかった。日本の操縦を受けながらも、台湾、朝鮮という二大植民地とは異なる政体が行われた。このような準植民地と半国家の間に位置する曖昧な政権が現れたことは、脱亜、興亜と東方文明論の上に膨れ上がった日本帝国主義に、さらに多くの地理的な資源と地域拓殖の想像を与えた。

満洲事変関係の報道、満洲事変記念日活動は「事変の内在化」を促進し、台湾人が次第に満洲という知られざる他者へ近づいていった重要な過程である。毎年行われた記念の日、記念の夕、北大宮模倣戦、台湾攻撃対応演習などを通じて、満洲事変は外地新聞の報道から島民の年中行事と日常的な身体体験へと浸透し、日／満／台の共通事件となっていく。南方の基地として帝国防衛システムの一

環である、という台湾の役割は、島民の国防観と帝国への一体感という観念の普及により、ようやく具体化されるに至ったのである。

祝日化した満洲事変記念日の記念活動は、正に概念、感情、身体経験の普遍化、共通化に重要な役割を發揮した。そしてそれは一九三六年に武官総督制が復活した後の小林総督の「南進」政策、ないしは一九四〇年代の台湾人志願兵ブームの出現に一定の社会的基礎を作り上げた。台湾における満洲を題材とする小説は、正にこのような時代に生まれてきた。遙かなる満洲は、「満洲事変記念日」によって次第に都市台北に内在化され、鳥都を舞台とする小説の中で、作品の素材として使われたのである。

『台湾新民報』は日刊発行の許可を得た後、「新聞小説」というジャンルを重視し、掲載した最初の作品『争へぬ運命』を連載終結後、即座に刊行・販売した。新聞社の編集責任者と作家は、新聞小説という場を借りて、新聞の言論に対する読者の注意と反応を呼び起こし、台湾人のメディアと社会問題に対する関心が喚起されることを期待した。その小説は、満洲事変以降の国際情勢と島内の議論を背景に、革命と宿命という二種の態度で結婚に臨んだ男女の主人公の「殊途同帰」（違う道だが同じ目的地）の運命を描いた。素人作家の手になったとはいえ、この小説は起伏に富み、ドラマチックで、豊富な時代情報を伝えている。輿論形成の焦点である日刊新聞の「社説」との間テクニクスの関係を通して、台湾最初の日本語新聞

小説はモダン都市の情愛物語に特殊な社会批判の言説を組み込み、日刊新聞を、隠れた言説が生成する場としたのである。この新聞小説が、深層の言説を浮かび上がらせた基本条件は以下の二点である。第一は『台湾新民報』が「台湾の代弁者」であるという輿論の信用性及び新聞小説の重視であり、第二は満洲事変後にさらに悪化した日本経済及び日本の農村のみに目を向ける米穀移出統制、農村救済などの措置に現れた植民地差別政策に対する台湾の輿論であった。

『争へぬ運命』は新聞小説の特徴を生かし、当時台湾の輿論がもつとも関心を持った二大問題——モダンな島都と台湾社会経済の苦境を、巧みに結びつけた。表象的な都市生活と恋愛結婚を表層とし、世界的な経済危機及び日本の対中戦争の影響が及ぼした植民地の産業と民衆生活の困窮を点描し、深層に満洲事変後の植民地都市の抱える暗雲を巧みにクローズアップしている。このようにしてこの作家は、台湾最初の日本語新聞小説の試作を完成したのみならず、台湾新聞紙上における新しい通俗小説ブームをも切り開いたのである。

注

- (1) 趙東輝「九一八事変與偽滿洲国成立」、東北淪陷十四年史総編室・日本殖民地文化研究会編『偽滿洲国真相』北京、社会科学文献出版社、二〇一〇年一月、一四—一九頁。
- (2) 一九三〇年代の十年間の『台湾新民報』（台湾人により創刊された新聞）はよく保存されておらず、保存状態がよい復刻原本には一九二〇年代の創刊から一九三二年四月九日までの部分しか収録されていない。それ以降一九四〇年一月一日までは、以下の部分を除いてすべて散逸した。個人の寄贈により幸運にも残された部分はすべてデジタル化され、以下の二つがある。一、中島利郎寄贈の「一九三三台湾新民報」（台南、国立台湾文学館出版、一九三三／五／二—二／三〇）、二、楊肇嘉寄贈、李承機主編『六然居存日刊臺灣新民報社説輯録 一九三三—三五』及び『日刊台湾新民報創始初期 一九三三・四・一五—五・三一』（台南、国立台湾歴史博物館）。『台湾新民報』は一九三三—一九三五年に所在が限られており、中断があつたりするため、この新聞に掲載された満洲事変記念日、承認記念日に関する報道は一九三三年以外の部分は知るすべがない。
- (3) 「満洲戦雲及岌果然開戦、北大營華兵襲我守備隊、我軍應戰占北大營一部」『台湾日日新報』一九三二年九月二〇日、夕刊第四面、漢文版。
- (4) 台湾軍司令部「満洲事変の原因」『台湾日日新報』一九三一年一〇月四日、夕刊第二面。台湾の民衆に台湾軍司令部の発言を知らせるため、同じ文章が中国語に訳されて、『台湾日日新報』（一九三二年一〇月四日、五日の朝刊、夕刊の第四版、漢文版）に掲載された。なお、本論において引用する日本語文献は新字体を基本とし、ルビを省略した。句読点のない場

合は適宜付した。引用する中国語資料の翻訳はすべて訳者によるものである。

- (5) 「台日漫画」「台湾日日新報」一九三二年一〇月五日、朝刊第四面。
- (6) 「満洲事變不觸條約、政府闡明主旨于中外」「台湾日日新報」一九三二年一〇月二〇日、夕刊第四面、漢文版。
- (7) 「満洲事變、臺灣無影響、総督在神戸談」「台湾日日新報」一九三二年一二月五日、夕刊第四面、漢文版。この報道にある「本国」は中国を指す。
- (8) 蘆溝橋事件は現在日中戦争と称される場合が多い。当時、中国側は七事変と称し、日本側は日支事変と称した。
- (9) 一九三〇年代前期、『台湾日日新報』朝刊は八面あり、第八面のみが漢文であった。夕刊は四面であり、最後の第四面のみが漢文であった。
- (10) 「満洲事變畫報」「台湾日日新報」一九三一年一二月五日、朝刊第四面、漢文版。
- (11) 「最も期待さる上海事件の映画、満洲事変其它の映画と共に、今夕二ヶ所で公開」「台湾日日新報」一九三二年二月一七日、夕刊第二面。
- (12) 「台湾日日新報」一九三三年九月一八日、朝刊第五面。
- (13) 一九三三年の『台湾日日新報』を例にとれば、以下の関係記事あるいは談話が載せられている。一九三三年三月二五日から三回にわたって殖産局の「南の生命線」、一九三三年六月一七日に台北州知事の「南方の第一線」、一九三三年九月四日に台北市大稻埕青年団長陳清波の「時局は南方!」、一九三三年一二月二八日に杉村公使が帰国し、門司で内地のメディアに「日本の生命線は南方に移った、満洲は最早心配はいらぬ」と表

明、一九三四年一月一日に台湾歩兵団第二連隊長の「台湾は帝国南方国防上の第一線、島民は其覚悟が必要」などである。

- (14) 「満洲事變記念日、訓練航空諸施設、全島實施各種行事」「台湾日日新報」一九三六年八月二五日、朝刊第一二面、漢文版。
- (15) 「満洲事変五周年を迎へて、輝く南方生命線、台北市並に地区防衛団、けふ厳かに結団」「台湾日日新報」一九三六年九月一日、夕刊第二面。
- (16) 「満洲事変より、支那事変へ」「台湾日日新報」一九三六年九月一八、一九、二〇日、朝刊第四面。
- (17) 例えば「満洲事変にも出征した勇士、安倍上等兵、名誉の戦死」「満洲事変にも、大活躍、早坂光一伍長」「台湾日日新報」一九三七年一〇月三〇日、夕刊第二面。
- (18) 「戦勝を祈願、満洲事変記念日に」「台湾日日新報」一九三七年九月二〇日、朝刊第五面。
- (19) 「我駐日大使館舉開 満洲事變紀念及承認祝賀會」(『濱江日報』一九四一年九月八日、第一面)、「追憶意義深遠之満洲事變 郷軍勇士演習攻防戦」(『濱江日報』一九四一年九月二〇日、第二面)を参照。
- (20) 「満洲事変十周年の思ひ出」「満洲事変の真の意義」という二つの特集は、『台湾日日新報』(一九四一年九月一四―二〇日と一八―二一日)に連載された。
- (21) 関係報道は『台湾日日新報』(一九四二年九月一五日、朝刊第一面)を参照。
- (22) 「満洲事変の世界史的意義、森部務長総官代理談」『台湾日日新報』一

- 九四二年九月一八日、朝刊第一面。
- (23) 「満洲事変十一周年記念日、盟邦の伸展を慶祝、挙島・必勝の決意更に新た」『台湾日日新報』一九四二年九月一九日、夕刊第二面。
- (24) 「満洲国も緬甸承認」『台湾日日新報』一九四三年八月三日、夕刊第一面。「満洲建国十一星霜、十五日独立の承認記念日」『台湾日日新報』一九四三年九月一三日、朝刊第一面。
- (25) 「満洲国承認、十一周年」『台湾日日新報』一九四三年九月一五日、朝刊第二面。
- (26) 在郷軍人会は台湾では「郷軍台湾支部」と略称し、当時の台湾メディアは「在郷軍人分会」あるいは「郷軍」と称していた。在郷軍人とは普段それぞれの職業につき、国家の必要に応じて召集される予備役、退役あるいは後備役軍人のことである。一九四二年に陸軍特別志願兵制度が正式に実施されるまで、台湾人は服役の資格を持たなかったため、台湾の在郷軍人はすべて在台日本人であった。
- (27) 「支那、九月十八日を、国難記念日に指定、全国的排日運動の懸念濃厚」『台湾日日新報』一九三三年九月一〇日、朝刊第七面。
- (28) 「全国民が一斉に、一分間の黙祷を捧ぐ、支那事変記念日を実施」『台湾日日新報』一九三三年六月六日、夕刊第二面。
- (29) 中国側は太平洋戦争の導火線を「珍珠港事変」と称する。当時の台湾メディアは日本の呼び名に従い、「真珠湾奇襲、空襲、強襲」などと称する。
- (30) 一九三三年を例にとれば、『台湾新民報』（九月一八、一九日）は斎藤首相及び荒木陸相の談話のみを掲載し、慰霊祭も台北、高雄、新竹という
- 三つの都市を中心に紹介しただけである。文章は短く、紙面の左上あるいは左下など副次的で、重要ではない場所に置かれた。『台湾新民報』（一九三三年九月一八日、第七面、九月一九日、第五面）を参照。
- (31) 「満洲事変一周年、計畫警備演習講演、参加人員五百余名」『台湾日日新報』一九三三年九月七日、朝刊第八面、漢文版。
- (32) 「満洲事変紀念行事、大舉慰霊祭」（一九三三年九月一七日、朝刊第八面、漢文版）を参照。「けふ、一周年記念日、蒼空に飛機の唸り、地に惨たる銃声！ 満洲事変を彷彿さす演習、後に一万の大衆行進」、「満洲事変一周年、記念の夕べ、午後七時三十分より、台北新公園より中継」、「想ひぞ起す一年前満洲事変突発の日、午前十一時五十分より満洲より特別中継」（一九三三年九月一八日、朝刊第三、四面）、「講演及映畫之夕」（一九三三年九月二九日、夕刊第四面、漢文版）。
- (33) 台北放送局は一九二八年一月に創設され、当初は無料で放送を提供していた。一九二九年九月に熊本放送局の周波数を使って日本内地の番組の放送を始める。一九三二年二月に台北放送協会が組織・拡大された後、月に一円の有料放送となる。同年七月に台湾籍の女性を採用して台湾語放送を開始。一九三四年九月に内地に向けて放送を開始した。新聞に掲載された「ラジオ番組表」から、一九三三年の毎日の放送時間は午前六時三〇分から午後九時三〇分までであったことが分かる。
- (34) 「満洲事変紀念祭、都中各団準備盛挙」『台湾日日新報』一九三三年八月一七日、夕刊第四面、漢文版。帝国在郷軍人会、仏教連合団体、国防協會、国防婦人協會の主催であるが、陸海軍、外務省、文部省、拓務省の後援を得ていることからその規模の大きさが窺える。

(35) 「満洲事変の、記念放送」JOAKから「台湾日日新報」一九三三年九月一四日、夕刊第二面。

(36) 「在満兵の慰問、満洲事変記念日に、高雄郷軍の企て」『台湾日日新報』一九三三年九月七日、朝刊第三面。「日華事變記念、映畫夕」『台湾日日新報』一九三三年九月一八日、朝刊第八面、漢文版。

(37) この年、台北市では記念式典、慰霊祭、模擬演習、記念放送、宣伝図書配布、愛国号の台北上空訪問などの行事が行われた。他に、警備演習、武道大会、射撃大会、軍隊関係功労者表彰、記念演芸、国防献金などを増やした。「満洲事変三周年、臺北紀念行事、實施記念式慰霊祭演習等、愛国號飛行上空訪問」〔台湾日日新報〕一九三四年八月一六日、夕刊第四面、漢文版を参照。

(38) 「満洲事變記念日、互臺灣全土、欲實施灯火管制」〔台湾日日新報〕一九三三年八月二三日、夕刊第四版、漢文版、「満洲事變記念日、全臺灣五分間黑暗、夜間九時半非常管制」〔台湾日日新報〕一九三四年九月六日、夕刊第四面、漢文版。

(39) 「けふ、満洲事変三周年、官民約二万が集つて、尊き犠牲者の慰霊祭、総督以下が玉串を奉奠」『台湾日日新報』一九三四年九月一九日、夕刊第二面。

(40) 「五分間、燈火管制」『台湾日日新報』一九三四年九月二〇日、夕刊第四面、漢文版。

(41) 「満洲記念日、屏東飛機、訪問各都市」『台湾日日新報』一九三四年九月一九日、夕刊第四面、漢文版。

(42) 「満洲事變記念、慰霊祭及諸行事」『台湾日日新報』一九三四年九月二

〇日、夕刊第四面、漢文版。

(43) 「高松宮殿下新京で、康德皇帝と御対面、あす満洲事変三周年記念日、連合艦隊大連に入港」『台湾日日新報』一九三四年九月一八日、夕刊第二面。

(44) 「縋帯三百本を、皇后陛下御下賜、満洲事変傷病者に」『台湾日日新報』一九三四年一〇月一日、朝刊第二面。

(45) 陸軍省は満洲事変の後長い時間が経過し、国民の認識が次第に薄れていく傾向に鑑みて、「日満関係の再認識に就て」『満洲国概観』を刊行して広く配布した。このパンフレットは台湾にも送られて各地で配布された。「満洲事変四周年記念日に、陸軍が小冊子配付、事変の再認識に懇へる」〔台湾日日新報〕一九三五年九月一日、朝刊第二面を参照。

(46) 「満洲事變四周年、臺北市記念行事、經團體長會議決定」『台湾日日新報』一九三五年九月二〇日、夕刊第四面、漢文版。

(47) 「臺北市記念満洲事變、實施全市防護演習、参加者郷軍青訓少青团」〔台湾日日新報〕一九三五年九月二〇日、夕刊第四面、漢文版。

(48) 「満洲事變記念日、臺南模擬戦及諸行事」『台湾日日新報』一九三五年九月一四日、朝刊第八面、漢文版。

(49) 関係報道は『台湾日日新報』(一九三五年九月一九日、朝刊第九面、漢文版)を参照。

(50) 満洲関係のパンフレットを配布したほか、『台湾日日新報』も七回にわたつて満洲建国精神、日滿不可分、滿蒙建設、満ソ支蒙関係などの時局に関する陸軍省の議論を連載した。

(51) 「満洲事変五周年を迎へて、輝く南方生命線、台北市並に地区防衛

団、けふ厳かに結団」『台湾日日新報』一九三六年九月十九日、夕刊第二面。

(52) 一九四〇年に近衛内閣は「大政翼賛会」を組織し、すべての政党を解散した。議会は開かれていたが、第二次世界大戦敗戦まで政党政治は回復されなかった。

(53) 林焯焜「争へぬ運命」(台北、台湾新民報社、一九三三年四月)。小説が掲載された時期の『台湾新民報』が残されておらず、原文は未見。単行本は台湾大学図書館に所蔵されている。中国語訳には二種類がある。一、陳寛(訳)『不可抗拒的命運』(板橋、台北県立文化中心、一九九五年六月)。二、邱振瑞(訳)『命運難違』上・下冊(台北、前衛出版社、一九九八年八月)。前者は原文に忠実であり、訳文は美しいが、若干の誤植がある。後者は語感において日本統治時代の面影を残し、意識の部分が前者より多い。それぞれ優れた訳であるが、脱漏がある。以下、小説の引用は林焯焜「争へぬ運命」(台北、台湾新民報社、一九三三年四月)により、頁数のみ記す。

(54) 代表的な先行研究としては、論文に下村作次郎、黄英哲「談戦前臺灣大衆文学——臺灣文学史的一段空白」(『中外文学』二七卷六期、一九九八年一月、二九—四〇頁)、星名宏修「從一九三〇年代之貧困描寫閱讀複數的現代性」(『台湾文学學報』一〇期、二〇〇七年六月、一一—二九頁)があり、學位論文に蔡佩均「想像大衆讀者——『風月報』、『南方』中の白話小説與大衆文化建構」(靜宜大学中国文学系碩士論文、二〇〇六年七月)、陳允元「島都與帝都——二〇、三〇年代臺灣小説的都市圖像(一九二二—一九三七)」(台湾大学台湾文学研究所碩士論文、二〇〇七年六

月)、陳利菱「『島都』與『戀愛』——『風月報』相關書寫的再現與想像」(清華大学中国文学系碩士論文、二〇〇八年六月)、鄭鳳晴「日據時期新女性的再現分析——以媒体記事與小説創作為中心」(清華大学台湾文学研究所碩士論文、二〇〇八年七月)などがある。

(55) 林焯焜は淡水の名家に生まれ、国語学校国語部を卒業した後、京都第二中学校、金沢・第四高等学校に学び、一九二八年に京都帝国大学経済学部を卒業した。台湾に戻った後、台湾興業信託株式会社社員になり、一九三〇年に淡水信用組合専務理事に抜擢され、一九三六年に専務理事の職務を辞退し、台湾農林株式会社主事を務めた。一九三九年四月に台北帝国大学医学院に入学するが、七月中途退学し、廈門特別市政府で実業科長を担当し、廈門至誠会幹事を兼任した。また台北市長呉三連の機密をつかさどる秘書を務め、後に彰化銀行に転職する。この作品は著名かつ唯一残されたものである。

(56) 「糖業が善処すべき、金輸出禁止の対策、過剩糖処分と糖業の基調整理」(『台湾日日新報』一九三二年一月九日、朝刊第九面)を参照。

(57) 排日の風潮が日中、台中貿易に影響を与えた状況、米日関係の悪化に影響された台湾茶葉輸出の状況については、以下の『台湾日日新報』の報道を参照。「長江附近農産被害、对华貿易大打撃、排日激烈貨難輸送」(一九三一年九月十七日、朝刊第八面、漢文版)、「昨年中の本島貿易内容(二)、直航路と排日の影響、中継輸出大激減/日支事件の中継、輸出に及ぼせる影響」(一九三二年一月二六日、朝刊第五面)、「金輸出禁止と台湾茶業の将来、需要地の状況が肝腎、未だ樂觀を不許」(一九三二年一月九日、朝刊第九面)、「銷往冲繩縣方面、臺灣茶復見全盛、日華事變以來華茶

入口杜絶」(一九三三年二月二十四日、朝刊第八面、漢文版)。

(58) 台湾茶の輸出減少には二つの原因があった。一つは南洋地区の消費低迷で、二つは排日貨の風潮により輸出量の減少を来したことである。「金輸出禁止と台湾茶業の将来、需要地の状況が肝腎、未だ樂觀を不許」(一九三三年一月九日、朝刊第九面)を参照。

(59) 謝介石(一八七八—一九四六)、台湾新竹の人。満洲国外交部総長(一九三二・三・九—一九三四・三・二)、外交部大臣(一九三四・三・一—一九三五・五・二二)、参議(一九三五・五・二—一九三五・六・一九)、駐日大使(一九三五・六・一九—一九三七・六・二三)などを務め、台湾人として満洲で最高の肩書を得た。駒井徳三が満洲国総務庁暫署総務長官を務めた期間は一九三二年三月一日—一九三二年六月五日である。小説は一九三二年三月の人事情報を誤って一九二九年六月の物語に書き入れている。

(60) 当時、「満洲」と名付けられるサービス業が実際にもあった。例えば、一九三五年台湾博覧会の商業ブームに乗って台北市のある商家は九カ月と十数万をかけて大和町で「トモエ会館」を新築した。会館は当時屈指の四階建ての大型総合飲食店であり、エレベーターを備え、付属のカフェーがあり、屋上からは台北市が見下ろせ、大屯山を眺める空中ガーデンと船形の西洋風レストランがあった。各階には格調の異なるレストランがあり、二階の西洋式レストランは「満洲」と名づけられ、中には「新京」、「奉天」、「哈爾濱」、「吉林」などの特別個室が設けられていた。「台湾に魁け、島都のカフェー戦線異状」(『台湾日日新報』一九三五年五月四日、夕刊第二面)を参照。

(61) 一九三〇年の『台湾日日新報』に「走在時代尖端…珈琲館栄昌記」という連載が載せられ、カフェーと関連する流行音楽が雪崩のように流れ込んできた様子が紹介されている。台北市最初のカフェーは「Linn」と「巴」である、と言及されている。「島都の尖端を行く、カフェー栄昌記」(『台湾日日新報』一九三〇年八月二十九日、夕刊第二面)を参照。

(62) 一九三〇年に台北市は都心の改造を経て更にモダン化し、完全に「現代都市」となり、「復興後の東京都を歩いている感がある」と報道された。「島都台北市のモダン化情景」(『台湾日日新報』一九三〇年五月三日、朝刊第七面)。

(63) 小説の中には、「今年台北の帝大を出た学士が、特別に採用されて、月六十円つていふですからね。全くひきあひませんですよ」、「毎年内地の一流あたりの会社や銀行の社員、行員採用に、採用人数の百倍以上も応募者があるといふ話だね」、「この一日の定例閣議に、官吏身分保障法規が討議されたり、大阪に、インテリ同盟が結ばれたりしてゐるのでございますよ」という会話が記されている(七三頁)。

(64) 当時の中上流家庭の婚約は、相変わらず家柄、学歴に拘り、多くの場合は媒酌人を介して縁談を結び、家長が公共の場で密かに観察して相手の人柄を判断するというものであった。

(65) 作家の設定した明治橋の自殺は、当時の台北の都市現象を反映している。明治橋は一九〇一年に建てられ、改造を経て戦後に中山橋と改名された。台北市の中山区に位置し、基隆河を跨いで、南岸の圓山と北岸の劍潭山を結び、台湾総督府と台湾神社の勅使街道(今の中山北路の一部)を結び重要な橋である。橋のたもとには劍潭派出所がある。この橋の中央は車

道であり、両側に歩道が設けられ、欄干には扇形の透かし彫りが施され、道沿いの景色がよく、一九二七年に台湾八景に選ばれた。この橋が落成した翌年、『台湾日日新報』紙上に自殺の報が現れた。その後、「橋下縊死」「情投意合的情死」「原因不明的厭世」「情婦留信投死」「娼妓投身」「芸姐投水」「投水遇救」「橋下不明死屍」などのニュースが続出し、わざわざ北上してここで自殺する外地の失意の者あるいは芸妓が跡を絶たなかった。

(66) 呉三連（一八九九—一九八八）、台南人。東京商科大学（現在の一橋大学）を卒業後、大阪毎日新聞記者を務め、一九三二年に台湾に戻って台湾新民報社編集となり、同年四月以降は『台湾新民報』日刊編集総務、論説委員、整理部長兼政治部長などの職を歴任し、「爆弾」というコラムを設けて時評を書いた。林焯焜「筆後記」には、二人は「数十年の親友」だと言及されている。出版された当時の林焯焜「筆後記」と呉三連による解説「衷心より感謝」によると、林焯焜は以前に日本語での創作を試みたことがあり、この小説は二人の間で台湾人が如何に日本語小説を書くかについての笑談から生まれたという。呉三連「衷心より感謝」（『争へぬ運命』五二二頁）、王昶雄「北台文学緑映紅——編輯導言」（陳寬（訳）『不可抗拒的命運』、原文に頁数なし）を参照。

(67) 林焯焜「筆後記」『争へぬ運命』五〇六—五〇八頁。林焯焜は昼間は多忙で夜一時以降にようやく原稿を書く時間ができ、毎日約二時間書いていたという。

(68) 李承機「殖民地臺灣「輿論戦線」之變遷——「輿論」兩義性的矛盾與「臺灣人唯一之言論機関的困境」」、「六然居存日刊臺灣新民報社説輯録（一九三二—三五）」（台南、国立台湾歴史博物館、二〇〇九年二月）、デジ

タルDVD、二一頁—二四七頁。以下、六然居DVD版と略称。

(69) 「衆望所歸的日刊誕生」（社説）、『台湾新民報』（一九三二年六月三日、六然居DVD版、四一〇頁）を参照。現存の六然居DVD版の「社説」は、原文は全て中国語である。原文はあまり流暢でないが、そのまま引用する。

(70) 前掲呉三連「衷心より感謝」。

(71) 林焯焜「筆後記」『争へぬ運命』五〇七—五〇八頁。

(72) 「要改善生活、須廢除迷信」（『台湾新民報』一九三二年六月一日、六然居DVD版、四一六—四一七頁）を参照。

(73) この言葉は林焯焜「筆後記」に出ている（『争へぬ運命』五〇七頁）。

しかし、『台湾日日新報』にはすでに漢文の長篇連載新聞小説が掲載されていたため、林の言葉は「台湾における最初の（日本語）新聞連載長篇小説」に訂正すべきである。

(74) 『台湾日日新報』一九三二年三月三十一日、朝刊第三面及び一〇月二一日、朝刊第三面。

(75) 「野球の中継（台北）（午後二時二十分）、台日主催法政対CB団決勝戦、台北圓山球場より」（『台湾日日新報』一九三三年一月一日、朝刊第五面。及び「法政対CB団比試、九對二法政優勝」一九三三年一月一三日、夕刊第四面、漢文版。後者は、法政大学対CB団の試合が一勝一敗となったため、第三回戦を行い、法政大学が九對二で勝利したと記している）。

(76) 「須考慮臺灣青年的進路」（『台湾新民報』一九三二年六月三日、六然居DVD版、四一〇—四一一頁）。

(77) 「臺米移入無統制之必要」（『台湾新民報』一九三二年六月一三日、六然

居DVD版、四一四～四一五頁。

(78) 現存する『台湾新民報』の社説を調べた所見である。現在、六然居DVD版は一九三二年四月一五日～一九三五年六月一五日の部分しかなく、社説にも欠落がある。

(79) 一九三二年の『台湾新民報』の関係社説を一例として挙げれば、「臺米移入限制、島民死活問題」(七月二日)、「米穀政策與米價之基礎」(八月四日)、「米穀管制問題須要關心注意」(十一月三日)などがある。

(80) 「米穀統制問題與臺灣」『台湾新民報』一九三二年一月二日、六然居DVD版、四一八四～四一八五頁。

(81) 「反對移出制限、宜有組織運動」『台湾新民報』一九三二年七月一七日、六然居DVD版、四一六六～四一六七頁。

(82) これに対し、『台湾日日新報』における関係報道ははるかに簡略である。例えば、「緊急委員会を開く、制限反対同盟会上京委員の件其他、之後の運動方針につき」(一九三二年八月九日、朝刊第五面)、「台湾米移入制限反対同盟会」(一九三二年二月二五日、朝刊第五面)などである。

(83) ストーリーの中の一九三二年六月～八月に相当する。関係社説は「農村的救済、臺灣也要考慮」(六月一〇日)、「農村救済豈限於内地？」(六月二三日)、「同是農村問題、臺灣偏被閉卻」(七月一三日)、「農村更生與産組聯合會」(七月三日)、「閣議決定之臺灣農村救済策」(八月一八日)など多数がある。

(84) 「農村的救済、臺灣也要考慮」『台湾新民報』一九三二年六月一〇日、六然居DVD版、四一四～四一五頁。

(85) 「農村救済豈限於内地？」『台湾新民報』一九三二年六月二三日、六然

居DVD版、四一〇～四一一頁。

(86) 「閣議決定之臺灣農村救済策」『台湾新民報』一九三二年八月一八日、六然居DVD版、四一四〇～四一四一頁。

(87) 前掲「農村救済豈限於内地？」。

(88) 満洲事変が発生した当時に在任した若槻禮次郎内閣(一九三一・四・一四～一九三一・一二・一三)と、満洲国の成立、国連による調査が行われた時期に在任した犬養毅内閣(一九三一・一二・一三～一九三二・五・二六)については直接言及していないが、時事背景として間接的に触れている。

(89) 「承認満洲獨立的現在與將來」『台湾新民報』一九三二年九月一日、六然居DVD版、四一五〇～四一五一頁。

(90) 「聳動世界的立頓報告書」『台湾新民報』一九三二年一〇月四日、六然居DVD版、四一五八～四一五九頁。

(91) 「國聯理事會的效果如何」『台湾新民報』一九三二年一月二〇日、六然居DVD版、四一八二～四一八三頁。